慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世における本地物の研究(五)
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1979
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.16 (1979.) ,p.275- 313
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000016-0275

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世における本地物の研究（五）

松本隆信

前稿までに、「神道集」に載せられた本地物語の諸篇を逐次とり上げてきた。それにつづき、本稿以下では、その他の室町期を中心に成立した本地物形式の物語について考察したい。それらの諸篇は、日本の諸所の神明に関してその由来を語るものと、仏教の仏菩薩等を対象として前生を語るものとの、二種に大別することができる。本稿でとり上げたのは、前者に属する「貴船の本地」「富士浅間明神の本地」「浦島太郎」「小男の草子」「物くさ太郎」の五篇である。

貴船の本地

本作の伝本は左のごとくであるが、ほとんど一本ごとに本文に複雑な異同が見られ、それらを系統づけることは困難である。ごくおおまかに分類すれば次のようになる。

（甲類）

(1) 慶應義塾図書館蔵〔室町後期〕写本「きふねの物語」　一冊（「室町時代物語大成第四」所収）

(2) 大東急記念文庫蔵奈良絵本「きふねの本地」三冊（「室町時代物語集第二」所収）

(3) 高野辰之氏旧蔵〔室町末期〕小形絵巻　二軸（大正大学郊北文学会編「国文学踏査第一輯」所収）

(4) 萩野由之編「新編御伽草子」所収本（底本未詳）

(5) 久原別邸旧蔵奈良絵本「きふね」　二冊

(6) 秋田県立図書館蔵大形奈良絵本「貴布禰」　一冊

(7) 御巫清男氏旧蔵写本「きふね」　二冊

（乙類）

(8) 明暦頃刊無刊記丹緑本「きふねの本地」　三冊（国会図書館・京大図書館・慶應義塾図書館等蔵。天理図書館にも丹

緑彩色のない同版本が存する。「室町時代物語集第二」「室町時代物語大成第四」所収）

(9)天理図書館蔵写本「きふねの本地」　一冊

(10)竜門文庫蔵奈良絵本「きふね」　二帖

（丙類）

(11)荏野文庫蔵〔近世初〕写本　一冊（横山重氏編「神道物語集」所収）

右のうち、乙類の(9)天理本と(10)竜門文庫本とは、(8)の丹緑本と全く同文と言ってよい本文を有する。丹緑本の本文を正し得る個所もあるが、丹緑本の誤脱と思われる部分まで一致する所も少なくない。従って、天理本と竜門文庫本は刊本をもとに本文を作った写本としてよいであろう。その他の諸本について、本文の特徴を略記すると、次の通りである。

(1)慶應本

本書は他の諸本に較べて、巻末の貴船大明神の利生を説く条が非常に詳しく、左のようになっている。

このさうしを見給はんする人は、木舟のまらうと神をしんし申さは、神のとくあらたに、めてたかるへし、されは恋する人は、ふつしん三ほうの御心にもかのふへからすと申せとも、このきふねのまらうとの御神は、こいせん物は我にいのり申へしと、ふかくちかはし給ふそかし、これも一さいのしゆしやうをみちひき給ふ御はうへんなり、このほんちをあらはし、ちやうもんすれは、恋ゆへかみとあらはれ給ふ、恋はまことのみちのはしめなり、此さうしをみゝにふれ、ちやうもんせは、日に三度まほるへしと御ちかへなり、いかにいはんやよみたてまつらん人、しんとくうたかいあるへからすくらまのひしやもんと、ふかくやくそくの事をはしまして、このひめみや、ちうしやうとちきりをこめ、木舟とあらはれ給けり、このほんちくはしくたつぬれは、へんさいてんにてをはします、されは恋をいのるのみならす、ふくしゆをねかはん人、たれかこの木舟の大明神もしんし申さらん、ほんふは、そのむかしをかたれは、きにさこふ、神はほんちをあらはせは、よろこひ給ふ、されは、日々夜々にほんちをよみ、ちやうもんせは、神はかこし給て、しよくわんしやうしゆ申へし、能々しんかう申へし、されは、この神のはしめをうけ給は、恋をは人のすへき物なり、恋ゆへ神とあらはれ給ふなり、うたかいなくしんすへし〳〵、あなかしく

右の部分に相当する文を他本で見ると、

（大東急本）神ほとけの御あはれみのありかたき事は、昔より今にいたるまて、ありかたき御ちかひ也、人の契りはたれとても、かやうのふかき事をこそ、おくゆかしくも、めてたくも候へし〳〵

（新編御伽草子本）諸願成就すべき事、さらさら疑あるべからず、それに依て、かゝる本地由来の物がたり、秘すべし秘すべし

（秋田県立図書館本）そのゝち、人のかみとあらはれて、一さいしゆしやうのねかひを、みて給はんとの御ちかひなり、きふねの御本地これなり、かへす〳〵是を御覧せん人〳〵

は、かみほとけのうやまひ、しん〳〵をいたし給ふへし、有かたかりける御事なり、あまりに〳〵、きとくふしきのことゝも侍るまゝ、かきつたへ侍しなり

(刊本)きふねのみやの御ほんぢこれなり、よく〳〵御しんかうあるへしとかや、申つたへ候なり

(荏野本)又はこれをきゝ給はん人は、南無きふね大みやうしんと、となへ給ふへし、これは、きふねのゑんきを、あら〳〵かきぬきたるさうしにて候、此さうしをもちたる人は、ふつきはんしやう、しよくわんしやうしゆ、かいりやうまんそく、よろつめてたく候物なり

のごとくである。高野本には、これに相当する文を見ることができない。右の慶應本の文中には、貴船明神の本地を弁才天とすることが述べられているが、他の本にはそれも記されていない。このように神の本地や、利生を説くことに多くの言葉を費しているのは、本地物として古い形態を残すものと見て良いであろう。慶應本は、諸本中書写年代の最も古いと推定される古本である。その本文には誤脱とすべき個所も見られるが、総じて言えば、本作の古態を伝える伝本と言えるのではないかと考えられる。

(2)大東急本

この本の本文は、概して言えば(1)の慶應本に最も近いが、所々、(8)の刊本の本文に通じる語句が見られる。たとえば、中将さだひらが扇の絵女房を見て恋となる条の、次の文のごときである。

(慶應本)おなしにやうはうと、ちきりをこめは、かほと見めよき女はうに、一夜なりともあひなれて、このよのゑいくわ、のちの世のおもいてにをほしめすより、たゝかりそめとおもへとも、やかてこいとそなり給ふ

(大東急本)かやうの人にこそ、ゆめのまもちきりをむすひたらは、こんじやうのおもひ出、ごしやうのうつたへともなるへしと、ふかくそおもひける、たゝかりそめとおもへとも、恋といふ二もしのわりなきは、あふき(ママ)よりほかに、やむことなし、はやこひのやまひとそなりにけり

(刊本)とてもうき世にあるならは、このやうなる女はうに、一夜なりとも、まくらをならぶる物ならは、こんしやうのゑいくわとなるへきと、たゝかりそめとおもへとも、こひといふ二もしのはかなさは、あふよりほかのくすりなしと、むねうちさはぎつゝ、よしなや、せんなやとはおもへとも、こひのやまふとはやなりぬ

右の傍線の句のように、大東急本と刊本との間に類似の語句の使用されている例がある。そのほかには、この大東急本独自の特徴と言えるような記事は見られない。

(3)高野本

本書も全体としては(1)の慶應本に近い所が多いが、その他の諸本とも部分的には類似する個所がある。また、本書だけが独特の叙述内容を有する所もやや多い。その顕著な個所を挙げれば左のごとくである。

○鬼国の姫君が中将との別れに際して、縹の帯を二つに切っ

て形見に残す条に、次のような二人の贈答の和歌が出ている。

わするなよ、われもわすれじ、いつまでも、はなだのおびの、むすぶちぎりを（姫君）

むすびとめ、はなだの帯の、しるべとて、神のちかひぞ、まさしかるべき（中将）

ここに和歌を記すのは、他には刊本だけであるが、刊本の和歌は、

この世にて、きみをみるめの、かたけれは、むまれあはんと、これかたみなり（姫君）

はかなくて、よのうきくもは、かわるとも、またこんよには、むまれあふへき（中将）

というもので、歌詞が全く異なっている。

○鬼国の姫が父の大王に殺された後、この世に生れ替って再び中将と契りを結ぶ条で、高野本以外の諸本は、中将の叔母二条の局が懐妊し女児を出産したが、左手の指が無いので片端として蓮台野に棄てたのを、中将が拾い上げて養育したとしている。高野本のみは、二条の局を法皇の御息所とし、御息所の生んだ姫宮が片端なので、法皇が中将に姫宮を棄てることを頼まれる。しかし中将は棄てるに忍びず、姫宮を引き取って養育したと述べている。

そこで、この姫君が生長の後、鬼国の姫の生れ替りであることが判明した時、他の諸本は、中将と姫君とが従兄姉同志の関係になるために、一門の男女が契りを結ぶことは昔から例がないといって、中将が歎くことを述べるのであるが、高野本では、姫君が法皇の御子であることを中将が憚ったとしている。高野本以外の諸本には「一もんの中のちきりをこむる事も、くわんへひほうわうの御時よりはしまりけり」（慶應本）という一種の起原説明の言葉が入っていることから見れば、高野本のような語り方は本来のものであったとは思われない。

高野本は、旧蔵者高野辰之氏の解題によれば、慶應本と共に書写年代の古い絵巻であるが、右のような特徴から見て、その本文は必ずしも古態を存するとは言い難いであろう。

(4)新編御伽草子本

本書も、本文の大要は慶應本や大東急本と変らないが、本文がくずれてくる傾向があるほか、部分的には高野本あるいは刊本だけと通じる個所が見られる。

(5)久原別邸本

未見であるが、「室町時代物語集」の解題によれば、新編御伽草子本に似ている所があると述べられている。

(6)秋田県立図書館本

本書は、物語の筋、叙述の順序には、前掲諸本と特に異なる所はないが、本文はかなり離れており、詳しい所と簡略な所とがあって、独自の特徴を多々有している。その幾つかを挙げれば次のようである。

○他の諸本は、中将の父母について、ほとんど記す所がないが、本書では随所に父母のことが出てくる。たとえば、中将

が扇の絵女房のことを神仏に祈願しようとして出で立つ時、他の諸本は「ちゝの大しんにいとま申、二てうの御まゐをたちいてゝ」（慶應本）とあるだけであるが、本書は、

中将、ちゝはゝにおほせけるは、さたひら、とてもすつへきいのちにて侍れは、御ゆるし給ふへき、たゝいとまをたひ給ひ候て、いかなるかみほとけにもきせい申、もしおもひなをし候はゝ、かへり申へしと、の給ひけれは、もしもなくさみて、なをる事もやありなんとおほしめし、ともかくもとありけり

のように、父母への暇乞いの場面に筆を費している。

○右に続く神仏への参籠の条では、清水寺をはじめとして諸社・詩寺を巡歴することがなく、すぐに長谷へ赴いて、鞍馬の毘沙門に祈請せよとの示現を蒙ることになっていて、簡略化されているが、鞍馬へ行く前に次のような記事がある。

御ともの人〳〵をも、これよりみやこへかへるへし、われはならのかたへまいり候て、そのゝち、みやこへかへるへしとのたまひけれは、御ともの人〳〵は、いまゝて御とも申候て、いまさらかへり候事は、ゆめ〳〵あるましきよし、かたく申されけれは、もつともそれはことはりなれとも、只みなかへるましきならは、こゝにてさたむるなりとの給ふほとに、御ともの人〳〵は、心ならす、みな〳〵みやこへそかへりける、しん中は、しつたたいしのそのむかし、たんとくせんに御ともせし、しやのくとねりか心のうちをも、いまこそとおもひしられたり、さて、みやこへかへりて、大しんとのに此よしくはしく申けれは、いかゝあるらんとて、人をはみな〳〵かへしけるそやとて、いまさらなけきかなしみたまふ事かきりなし、さても中将は身をやつし、むそうのことくに、くらまへまいり給ひけるこういう記事は他の本には見えない。ここにもまた父母のことが出てくる。

○鬼国の姫宮が父の大王の命に背いて、中将に自分を捨てて都へ帰り、後世を弔うことを頼む条に、

みつからは、くわこにてんによにてありつるか、ゐんくわをはなれかたくして、おにのことむまる也、こんとしやうをのかれすしては、なかくならくにしつみなん、されはひしやもんの御はからひにて、御身にちかつき申事も、みつからうかまんそのため也

という言葉がある。このように毘沙門が中将を鬼国の姫に引き合わせたのは、姫を輪廻の業から救うためであったというようなことは、他本には出ていない。

右のように、秋田図書館本には独自の叙述を見せている個所が多く見られる。写本系統の中では、(1)～(5)の諸本からかなり離れた本文を有する伝本である。

(7)御巫本

本書は未見であるが「室町時代物語集」の解題には、(6)の秋田県立図書館本と同系である旨が記されている。

以上のように、(1)より(7)までの写本は、ごく大まかに言えば同類であるが、本文の異同は複雑に入りくんでいて、それを解

きほごして諸本間の関係を整理することは大変困難である。ちなみに、物語中の人名など固有名詞について、諸本における相違を示しておく。

○鬼国の大王の名

(1)らんはさうわう　(2)らんば王　(3)らんはさうわう　(4)らんてはそう　(6)らんはそうわう

○鬼国の姫宮

(1)こんつ女　(2)こす女みや　(3)こんつ女　(4)たつ女の宮　(5)たつ女　(6)こんつ女　(7)こんつ女

○鬼国の大王の后

(1)ひらんは女　(2)ひらんはによ　(3)にちらんによ　(4)ひらんによ　(6)ひらんは女

○大王の使の小鬼

(1)くつやしや　(2)くつやしやの娘おとまる　(3)くつやしやの娘をとまる　(4)屈夜叉　(6)をとわか

○身体の大小を自由にする杖

(1)しゆくわんちやう　(2)四八ちやう　(3)しゆくはんちやう　(4)ゑはつじやう　(5)ゑはつしやう　(6)四くはんちやう　(7)四くわんちやう

(8)刊本

上記の写本に対して、刊本の本文は次のように、かなり相違のある個所が多い。

○扇競べのために大臣殿がたくまの法眼という絵師に女房絵を描かせた時、絵師は鞍馬に籠り、夢に毘沙門の示現を得て美女の姿を描いたという一節がある。写本では、秋田県立図書館本と御巫本に、中将が鬼国の姫にはじめて逢った時、姫の言う言葉の中に、絵師が鞍馬に籠って自分の姿を描いた由が述べられているが、その他の諸本にはこの事は見えない。

○中将が扇の絵女房に逢うために神仏に祈願をこめる条で、秋田図書館本と御巫本を除く写本は、まず清水へ詣で、それより太秦寺・八幡・伊勢・賀茂・春日などを巡拝し（この間は諸本の異同が多い。慶應本・高野本が最も少なく、新編御伽草子本が最も多い）、その後、長谷にて示現を得て鞍馬へ詣でるという順序であるが、刊本では、まず春日に参籠し、次に長谷に詣でて示現を蒙り鞍馬へ赴くという風に簡略化されている。ただし、その間の叙述は写本よりもかえって詳しい。

○中将が鬼国の姫の居所へ赴き、四季の景色を眺める条に、刊本では春夏秋冬に一首ずつの和歌を記すが、(1)～(7)の諸本は、慶應本・大東急本・新編御伽草子本では春の歌一首だけ（歌詞は刊本とほぼ同じ）、秋田県立図書館本・御巫本では一首も見えていない（ただし高野本と久原別邸本はこの部分が欠失している）。

○鬼国の姫が中将との別れに際して、縹の帯を二つに切って形見に与える条に、刊本には姫と中将との唱和の歌がある。(1)～(7)の諸本の中で、ここに歌を記すのは高野本だけであるが、前掲のごとく歌の詞は全く異なっている。従って、高野本と刊本とは別々に歌を増補したと見ることができる。

○日本へ帰った中将が、亡き鬼国の姫のために五戒を保ち、孝養を営む条に、刊本には次の一文がある。

あさゆふおほしめしいたして、うちなけき、すこしもまとろみたまはねは、ゆめにもうつゝにも、みやのありし御すかたにて、そひふしたまひて、かくなん

むらさきの、くものうへには、いたれとも、こひしき人は、つゆもわすれす

と、をほせありしこととともを、おほしめしつゝけて、すこしまとろみ給へは、みやの御すかた、をもかけ、ゆめに御らんして、すでに御そはへよりたまはんとしたまへは、ゆめうちさめて、こはゆめなり、なか〳〵にをとろかて、月日ををくらまし物をと、はかなきゆめのならひそとて、をそふるなみたは、ふるあめのことし

右のように、姫をしのんで歌をよんだり、夢にその姿を見るといった記事は、(1)～(7)の諸本には見られない。これも刊本独自の増補のように思われる。

○中将の叔母が生んだ女児が片端であるというので、蓮台野に棄てたのを、中将が拾い上げて養育する条で、諸本は、その姫が十三になった時、鬼国の姫の生れ替りであることを中将に明かし、握ったままの左手の指を開いて縹の帯の切れ端を見せたと語っている。ところが刊本では、蓮台野に棄てられている女児の傍へ寄ってゆくと、女児は握っていた指を開いて帯の切れを見せたとある。そして女児が成長するのを待って昔の事を語り合わせるという風に述べているのであるが、このような刊本の語り方には不自然さが感じられる。

右のように刊本には独自の記事が多く見られるのであるが、それらの部分は、慶應本や高野本のような古い写本をはじめ、甲類の諸本では刊本に対して、ほぼ共通の相違を示しているので、刊本の本文は新しく改変の加えられたものと言うことができるであろう。

(11)荏野文庫本

以上の甲類と乙類の諸本の間には共通する部分も多いのであるが、この丙類の荏野文庫本は、甲乙両類からは非常に隔りの大きい本文を有する異本である。物語の叙述の順序が異なる所が見られると共に、総じて簡略になっている。大きな相違個所を挙げれば次のようである。

○冒頭で諸本では、法皇の許しを得た中将は都中の美女を片端から迎えては送りしていたが、心に叶う女がいなかったところ、扇合せに出された絵女房を見て恋にとりつかれたとあるのを、本書は、最初に中将は扇の絵女房に心をひかれ、法皇に願って天下の美女を次々と迎えたが、扇の絵姿ほどの女は得られなかったとしている。その扇の絵も、諸本は中将の叔父大臣殿が絵師に書かせたとするが、本書では法皇が書かせた絵となっている。

○諸本、中将の恋の相手が扇の絵女房であることを聞いた大臣殿は、中将に鬼国の大王の姫の様を語って聞かせることがあるが、本書はこの条を全く欠く。本書では、中将は法皇の勧めで清水へ参ることとなっている。その神仏に祈願の条

も、清水にて示現をうけてすぐに鞍馬へ参ることになっていて、長谷をはじめ諸寺社巡拝のことは略されている。

○鬼国の姫に伴なって赴いた大王の宮殿の状景描写が、他の諸本に較べて著しく簡略である。四季の景を述べる条でも和歌は一首もない。

○諸本、鬼国へ戻った姫の許へ大王より呼出の使があり、姫は中将の身体を小さくして肌の守りに納め、大王の前へ出るのであるが、本書は、鬼国へ帰るとすぐに中将の姿を縮め、その後に大王から使があるというように順序が入れ替っている。また、この条の叙述も他本よりずっと簡略である。

○姫や中将の見ている前で、日本からとられてきた花見の少将を包丁することが記されていない。

○鬼国の大王が、中将を逃がした姫を料理する所の状景描写がない。

右のほかにも、総体に簡略化された本文を有している。この系統の伝本は他に見られないことからすると、おそらく甲類の系統の写本から分れ出た傍系の本であろう。乙類の刊本系と直接交渉があるところは認められない。

以上見てきたところによって、本作における諸本の関係を系譜の形で明示することは困難であるが、比較的純粋に古態を残している伝本を求めれば、甲類の(1)慶應本(2)大東急本がそれに当ると言ってよさそうである。

さて、この「貴船の本地」の物語の内容について見ると、部分々々の趣向には、この時代の他の作品の中に、それぞれ類例を見出せるものがある。この物語の中心をなすとも言える、契りを全うすることができずに死んだ女性が、再び生れ替って男と添いとげたというのは、「海士物語」や「鶴の草子」と同様であり、中将を逃がして身代りとなった姫の死を中将が知るところは「御曹子島渡」と似ている。その他、発端の扇の絵女房のことは、昔話として広く分布する絵姿女房の話と関係があろう。「海士物語」は古物語の改作らしいので(注1)、本作に先立って存在したのかもしれないが、「貴船の本地」も後述のごとく成立の早い作品と思われ、「鶴の草子」や「御曹司島渡」よりは古いかもしれない。いずれ当時行なわれていた説話の類を種にしたのであろうが、一篇の物語としては興味深い筋の運びになっており、後出の物語草子にかなりの影響を与えたことが考えられる。

この物語は貴船明神の本地を語ると共に、鞍馬の毘沙門天の利生を説いている。鞍馬寺の縁起については、東寺の造寺長官であった藤原伊勢人が私寺建立の願を起したところ、貴船明神の夢告があり、伽藍建立の地を示された。年ごろの乗馬に鞍を置いて霊夢の所へ行けと言い含めて放ち、馬の足跡をたどると果して夢告の地に行き着いた。そこに毘沙門天の像があったので本尊として堂を造り安置した。寺の名は鞍置き馬によって尋ね至った所であることに因むという伝えがある(注2)。「貴船の本地」において、鞍馬の毘沙門の示現によって中将と鬼国の姫とが結ばれ、末に夫婦ながら貴船の明神と顕れたと語っているのは、

いわば鞍馬寺の縁起の逆をいっているわけである。おそらく本地物語の作者は、右の伝承を承知の上で、こういう物語を作ったのであろう。また、東寺の峯延という僧が鞍馬に尋ね入った時、夜ふけて女の形をした鬼に襲われたが、朽木の下に隠れて毘沙門天を念ずると、朽木が倒れて鬼をおしつぶし、難を遁れたという話もある。(注3) この説話も本地物語創作に当っての有力な種となったものであろう。

なお、この物語の終りの方に、五節供の由来を説く条があるが、それと非常によく似た記事が「壒嚢鈔」に載っていることを、野村八良氏が指摘されている。(注4)

節分ノ夜、大豆ヲ打事ハ何ノ因縁ソ、是更ニ慥ナル本説ヲ不レ見。由来ヲ云人ナシ。但シ或古記ノ中ニ云、節分ノ夜大豆ヲ打事ハ宇多天皇ヨリ始レリ、鞍馬ノ奥僧正谷美曾路池ノ端ノ方丈ノ穴ニ住ケル、藍婆惣主ト云二頭ノ鬼神、共ニ出テ都ヘ乱レ入ントシケルヲ、毗沙門ノ御示現ニ依テ、彼寺ノ別当奏シ申子細アリ。主上聞召スニ、明法道ニ宣旨アリテ、七人博士ヲ集テ、七々四十九家ノ物ヲ取テ、方丈ノ穴ヲ封シ塞テ、三斛三斗ノ大豆ヲ熬テ鬼ノ目ヲ打ハ、十六ノ眼ヲ打盲テ、抱ヘテ飯ルヘシ、又聞鼻ト云鬼人ヲ滅ントスルヲハ、鰥ヲ炙串ト名付テ、家々ノ門指ヘシ。然ラハ、鬼ハ人ヲ不レ可レ取ト云御示現也ト云云（壒嚢鈔巻一の八十三）

これに「貴船の本地」を較べてみると、

又ひとつのふしきあり、きこくに候ける、らんはそうわう、これを見て申けるは、あなふしき、一ととりて、ゑしきにしたらは、こりもせて、かのひめか、二世のちきりをわすれしと、又うまれあひたるにくさよ、こんとは二人なからとりて、ゑしきとせんとて、八人のらんはともをさきとして、日本へわたらんとする

その時、くらまのたもんてんの、これをひんきやうにて御らんし、しゆしやうりやくのためなれは、へつたうに、しけんをくらせ給ふ、大きにおとろき給て、ほうわうにそうもんす、ほうわうきかせ給て、みやうほうとうの物ともめして、れいもんをひかせ給ふ、れいもんをひきて申事は、このをには、せちふんの夜かならすわたりて、日本の人をとるに、此をにわたらぬたくみあり、七人のはかせ「七ノ〳〵四十九間の家のものをとり」、くらまのおく、そうしやうかたにのおく、ゆわやをふうしふさきて、三石五斗のまめをいりて、をにのめをうつといふ事をするならは、鬼か十六のまなこをうちつふされて、まなこをかゝへてかへるへし、かきはなをにかわたりて、人をとらんとするには、うをゝやきておくならは、をには日本へはわたるへからすと申せは、五せつくをはしめよとて、五せつくをはしめらるゝ（慶應本）

というように、ほとんど同じ内容のことを述べている上に、文章までだいぶ似通ったところが見られる。「壒嚢鈔」は文安二年、北山観勝寺の行誉の撰述にかかる書である。普通ならば、「貴船の本地」が「壒嚢鈔」またはそのもとになった所伝を利用したというべきであろうが、両者を比較すると「壒嚢鈔」が鬼の名を藍婆・惣主の二頭とするのは、「貴船の本地」の「ら

んはそうわう（藍婆惣王）」の誤りと思われるごとき個所が見出される。「嚢嚢鈔」の記述はあまりにも「貴船の本地」に密着しているので、「或古記ノ中ニ云」とある「古記」とは、貴船の本地物語ではなかったかと想像することも許されよう。「貴船の本地」のような作り物語からの引用であったために、「或古記」という風に、出典を明示しなかったのではなかったか。「貴船の本地」は古い写本もあり、諸本の間の本文の分化も複雑であるところから見て、その成立はかなり遡る可能性があるが、「嚢嚢鈔」との関係を右のように考えれば、文安以前の室町初期には既に流布していたのかもしれない。

終りに、本地物としての本作について見ると、結びの文の最もくわしい慶應本では巻末において、

ひめきみは、ちうしやうにむまれあひ、百廿年をたもち給て、そのしやうをかへすして、あら人神となり給ひて、木舟の大明神とあらはれて、しゆしやうのくわんをみて給ふ、ちうしやうも百廿年のよはひをたもち給て、まらうと神とあらはれ給けり

と、荒人神として示現したことを言い、また、

されは恋する人は、ふつしん三ほうの御心にも、かのふへからすと申せとも、このきふねのまらうとの御神は、こいせん物は我にいのり申へしと、ふかくちかはし給ふそかし、これも一さいしゆしやうを、みちひき給ふ御はうへんなり、このほんちをあらはし、ちやうもんすれは、恋ゆへかみとあらはれ給ふ、恋はまことのみちのはしめなり

と、男女の道における利生が、衆生擁護の神道の本誓であることを強調している。「神道集」に載った本地物においても、男女の道における苦難を主題として神の前生を語る作品が多いが、本作もそのような古い本地物の世界を受けついでいることが見られる。

貴船社の祭神は、罔象女神とも高龗神・闇龗神とも言われ、水を司どる神として、大和国丹生川上社と並んで、祈雨・止雨の祈願の対象となって広く信仰されていた。一般民衆にも親しみの深い神であったと思われるが、そういう神に着目して、それを恋の道の守護神に仕立て、現世と他界の両方にまたがる恋物語を以て本地を語ったのは「神道集」の本地物と通じる作者層であろう。前掲の五節供の由来を述べる条には「牛頭天王縁起」と同じく、陰陽道と深く関連するところが見られる。おそらく陰陽師山伏と呼ばれるような宗教者が関与した作品ではないかと推測されるのである。

（注1）　市古貞次氏は「海士物語」が風葉和歌集所載の古物語「あま人」と関係があるのではないかと想像されている（中世小説の研究）。

（注2）「扶桑略記」延暦十五年の条、「拾遺往生伝」巻下、「今昔物語」巻十一第三十五、「十巻本字類抄」クの諸寺、等に見える。

（注3）「扶桑略記」「拾遺往生伝」には、右の縁起の記事に続いてこの話を記す。また「今昔物語」は巻十七第四十三

に、単に修行僧のこととして同様の話を載せる。

(注4) 野村八良氏「室町時代小説論」

富士浅間明神の本地

富士浅間明神の本地を語るものとしては、「神道集」巻八に「富士浅間大菩薩事」があり、またそれとは物語の内容を全く異にする草子の諸本がある。まず「神道集」記載のものは次のような内容である。

雄略天皇の御代、駿河国富士郡に管竹翁と加竹嫗という老夫婦があり、子のないことを嘆いていると、後苑の竹の中に女子が一人化来した。容貌類なく、あたりも輝く程であったので、老夫婦は赫野姫と名づけて養育するうち、時の国司が姫を寵愛して夫婦の契を結んだ。かくて年月を送る程に、老夫婦が亡くなると、姫は、自分は富士の仙女で、過去の宿執によって老夫婦の許に天下ったが、今は縁も尽きたので仙宮へ帰ると言って、反魂香の箱を残して消え失せる。夫の国司は時々この箱を開いて、煙の中に現れる姫の姿を見ていたが、ついに思いにたえられなくなり、富士の山頂へ登る。すると、中島のある大きな池の中から煙が立ち昇り、かの姫の姿がほのかに見えたので、男は思いの余りに池へ身を投じた。その時の両方の煙が今に至るまで絶えず、富士の煙というのである。その後、赫野姫と国司は富士浅間大菩薩として、男体女体の神と顕れた。それ故、恋路に迷う人は大菩薩に祈願すれば必ず願いが叶うのである。

鶯の卵から生れたかくや姫が竹取の翁に養われたという説話は、周知のように「海道記」に記されている。「海道記」では「竹取物語」と同じく、かくや姫は帝の求婚に応じなかったのであるが、「詞林采葉抄」に「富士縁起に云く」として載せるものになると、帝を桓武天皇とし、天皇は姫の後を追って富士に登り、姫の誘いに応じて頂上の岩窟の中に入って再び出られなかったとある。そして、姫は富士浅間大神、竹取翁は愛鷹明神、嫗は犬飼明神と顕れたと記している。右の「神道集」所載の「浅間大菩薩事」の説話としての形は「詞林采葉抄」の引用する「富士縁起」に近い。ただ、姫への求婚者を国司とし、姫と国司とは、いったんは夫婦の深い契を交しながら離別の余儀なきに至ったために、男が後を追って共に神と顕れたという風に、神が前生において人間の憂悲苦悩を味わったとする本地物式縁起へと変化している。おそらく「神道集」は、既にかくや姫説話を以て富士浅間大神の縁起が説かれるに至っていたものに、独自の手を加えて、右の「浅間大菩薩事」の一章を作ったのであろう。

ところが、右の「神道集」所載の富士浅間明神の本地とは全く別の本地物語が次の諸本によって伝えられている。

(一)東大国文学研究室蔵〔近世後期〕写本「源蔵人物語」(内題) 一冊(「室町時代物語集第二」所収)

(二)中川芳雄氏蔵写本「浅間記」(外題) 一冊(「静岡女子短期大学紀要第九号」所収)

㈢中川芳雄氏蔵天保三年写本「駿河国浅間記」（内題）　一冊
（「静岡女子短期大学紀要第九号」所収）
㈣横山重氏蔵安永二年写本「浅間御本地御由来記」（外題）
一冊（「室町時代物語集第二」所収）
㈤高野辰之氏旧蔵筆者現蔵〔室町末近世初間〕写本　一冊
（「室町時代物語集第二」に「異本源蔵人物語」と題して所収）

以上の五本は物語の大筋においては一致しているが、詞章の異同ばかりでなく、記事内容にも違いの見られる伝本も含まれている。五本の中で、その本だけの独自の特徴が最も少ないのは㈠の東大本である。そこで、まず東大本によって物語の筋を掲げ、次に他の四本の特徴を対照してみよう。

(1)都に源蔵人という才色兼備の人があった。下野国の五万長者の娘の噂を聞き、見ぬ恋にあこがれて神仏へ祈願すると、利生あって下野守となる。
(2)蔵人は急ぎ下野へ下り、長者の許へ文をつかわす。長者は喜び、御殿をしつらえて国司を迎える用意を営む。
(3)その日も近くなったので、長者の女房は娘を湯殿に入れようとしたところ、娘は既に懐妊の身となっていることを知る。
(4)長者は当惑して、高い峯の上で綿にイナセシという魚を包みこんで焼き、これを火葬と詐って、国司に娘が急死したと告げる。
(5)長者は娘の侍女たちを責めて詮議すると、判官太夫なる者が通っていたことがわかり、娘を馬に乗せ、太夫と共に館を追い出す。
(6)河越に着いた時、長者の娘は産気づき、太夫が水を求めに出た間に姫君を生む。丁度そこに、望を失って駿河国へ上る道の国司源蔵人が通りかかる。長者の娘は蔵人に誘われるまま、赤児の姫をその場に残して、蔵人に伴なわれて立ち去った。
(7)水を求めて立ち戻った判官太夫は、とり残された姫を懐に抱き、跡を追って西へ向う途中、足柄の四万長者にとどめられ、姫は長者の子として養育される。
(8)姫君十三になった時、太夫は出家遁世の暇を乞うが、姫が共にと慕うのを見て、長者も泣く泣く姫を太夫と共に出で立たせた。
(9)駿河国清見関を過ぎる時、邪慳長者という者が姫に目をつけ、二人を宿した上、ひそかに判官太夫の首を打つ。しかし太夫の首が口を開いて姫に危難を知らせ、姫は邪慳長者の館を遁れ出る。
(10)姫は駿河国の国守の館の前を通る時、国司の眼に触れて招き入れられ、国守の北の方となっていた母君との対面を遂げる。
(11)国守の北の方と姫君とは太夫の菩提を弔い、その後、北の方は浅間大菩薩、国守は総社大明神、姫君は浅間嶽の神、足柄の四万長者は三保の御所大明神、下野の五万長者は富士の五所の神、とそれぞれ顕れた。

以上のような東大本の物語の筋を基準にして、他の四本の主な相違を抽出してみると次のようになる。

（1）の条に、高野本には、五万長者（高野本は「こまひ長者」とする）の娘の方でも、都の源蔵人の噂を伝え聞いて、見ぬ恋に心を焦したという記事があり、娘が心の中をよんだ二首の和歌が記されている。しかしこの記事は、次に源蔵人が下野へ下ってきて求婚した時、娘は既に身ごもっていたという諸本共通の記事と相応しない。後の（6）の条で、娘が赤児を棄てて蔵人に伴なわれて行くという筋が不自然なために、娘はかねてから蔵人に想いを寄せていたとするこの記事を挿入したのではなかろうか。

（1）と（2）との間に、横山本には、ある夕暮五万長者の娘の前に月の桂男と名のる童子が忽然と現れ、仮に人間と生れて衆生を済度するために姫の胎内を借りたいといって、白蛇となって娘の体内に飛び入ったという記事がある。これも、他の諸本では娘を身ごもらせた相手の判官太夫という人物との関係が不明瞭であるために、このような記事を増補したものと考えられる。

なお源蔵人が下野へ下るところの道行文は、諸本の関係を考える上で有力な材料になるのではないかと思われるので、次に並列してみる。

〈東大本〉いつしかに、思立ぬる、たひ衣、君にはいつか、あふ坂の、せきをはあとに、しかのうら、なみに日かす、立ぬれは、我身のをわり、いかならんと、おもいなからに、うち過て、こゝやいつくと、たつぬれは、三かわの国や、八つはしの、くもてに物を、おもふそと、かねて聞しも、かくやらんと、うちなかめさせ給ひて、いそき行すき給ふほとに、都はいとゝ遠江、さよの中山、打すきて、すへはいつくと、きく川の、さとをとをれは、ほともなく、するかの国に、つき給ふ、雲のあしから、よをこめて、あけてそ見ゆる、はこねやま、ふもとを過て、なかむれは、つりする舟の、おほいそや、あみの一しき、めにかけて、くたれはきこゆ、はやかまくらに、着給ふ、いそけはすへも、いさしらす、とをくゆき行、むさし野ゝ、くさふみわけて、たひ衣、きつゝいつちと、たつぬれは、下野の国につく、うれしやさては、ほと近き、国のなさけは、うつゝとも、ゆめともわかぬ、心地して、はや下野に、つき給ふ

〈中川本甲〉都をば、まだよをこめて、いつるみの、いつしか君に、あふさかの、せきをは何と、しがのうら、波もひかすに、たちぬれは、我かみのおわり、なとやらん、こゝはいづくと、たづぬれば、三河の国、八橋の、くもでに物を、思ふとや、兼而聞これやらんと、打詠させたまいて、下らせ給ひける程に、都はいとゝ、とをくみ、さよの中山、打過て、こゝは何国と、きく川の、里を通れは、程もなく、駿河の国に、着給、くものあしがら、夜をこめて、あけてそ見ゆる、箱根山、さかみの国を、打過て、遠く成行、むさしのゝ、草ふみわけて、恋衣、いつちとたつぬれは、是ははや下野に、着給ふ

〈中川本乙〉爰に一しゆ
都をは、また世おこめて、いつる身の、いつしか君に、あふさかのせき
と、かように遊し、御屋形を出させ給ひ、程なく下野の国に、付せ給ふ
〈横山本〉都をは、また夜をこめて、出る身の、いつしか君に、おふさかの、関をは何と、しかの浦、浪も日かつも、かさなりて、わか身のおわり、いかならん、こゝはいつくと、とう〳〵み、三河の国や、八橋の、くもてにものや、おもふらん、かねて聞しも、これやらんと、打なかめ、さよの中山、打過て、こゝはいつくと、菊川や、里打過て、程もなく、駿河の国に、着給ふ、くものあし高、夜を込めて、明てそ見ゆる、箱根山、さかみの国も、はや過て、遠くなり行、武蔵野の、草ふみわけて、恋衣、いつくとこゝを、尋るに、はや下野にそ、着給ふ
〈高野本〉さるほとに、おかしきなかうたをそ、よみたまひける
まくらより、あとよりこひの、よもすから、我みを責（ワカ　セム）、くるしさに、おきてたとれは、わかおもふ、人はあらしの、風さえて、なみたの露の、たまかつら、心にかけぬ、ひまそなき、まくらのしたは、あまを船、釣するほとに、うきぬらん、さよもふけゐの、うら風に、うかれもて行、うき船の、道にあらねは、いつとなく、こかれてきみを、こふるかな、さすかにかくは、おもへとも、あはすはいかに、よるなみの、うらみかほにて、かへるへきかな
かやうにゑいして、くにへくたりつきたまひぬ
中川本乙と高野本とは、道行文の形をとらず、全く異なった文章であるが、東大本・中川本甲・横山本の三本は、かなり近い本文の姿を見せている。まず東大本と中川本甲とを対照すると、中川本甲の傍線を付した、大部分の語句は、東大本とほぼ一致する。そして、中川本甲の、それ以外の句「都をば、まだよをこめて、いつるみの」と「さかみの国を、打過て」の二個所は、横山本には存在することが見出される。次に横山本を中川本甲と較べると、中川本甲の「兼而聞これやらんと、打詠させたまいて、下らせ給ひける程に、都はいとゝ、とを〳〵み、さよの中山、打過て」の傍線の部分が欠けているが、この句は東大本には存在する。つまり、中川本甲は東大本と横山本の両方に関係するが、東大本と横山本との間には直接のつながりはないと考えるべきもののようである。
次に（4）の条には、東大本では左のように、長者の歌一首と、国司の歌三首とが記されている。
（長者）絶やらぬ、心のわたに、つみこめて、我子のしろに、つなしやくらん
（国司）あの見ゆる、雲の煙の、立はてぬ、何を印に、我は尋ん
あの見ゆる、谷みねことに、尋逢、あわすは恋に、身をやなけ南
おもいきや、君をこいしの、草枕、あわぬ涙に、しつむへし

とは

中川本甲は同じであるが、長者のよんだ歌は

とりべのゝ、けふりともなれ、たのみつゝ、我このしろに、つなしやくらん

とあって、上の句が東大本と異なる。中川本乙は中川本甲と歌の数、歌句ともに一致するが、国司の歌三首が先にあり、長者の歌はその後に記されてある。横山本は、長者の歌だけで（歌句は中川本甲乙と同）、国司が歌をよむことは述べられていない。また高野本は、長者の歌がなく、国司の歌も次の二首となっている。

あはれなる、くものけふり（ここ）、たちきえは、何をしるへに、われはたつねん

あなたなる、たにみねことに、尋わひて、あはすはこひに、身をやなけまし

右のように、東大本と中川本甲との間、中川本甲・乙と横山本との間には、それぞれ関係のあることが認められ、高野本のみは独自の特徴をもっているが、このような傾向は歌の上だけでなく、この条の本文全体の上にも現れている。

（5）横山本だけは、女房たちを詮議の結果、娘の懐妊の相手は月の桂男とわかるが、このままにはおかれないというので、郎等の判官太夫に命じて、娘を馬に乗せ追い出す。しかし太夫はこれをあわれんで、自ら娘の供をして家を出るということになっている。

また、判官太夫という人物について、東大本は「女ほう申けるは、はんくわん太夫との、此三年かあいた参り給ひ候、その外の事は承申さす、と申けれは」と述べるだけで、中川本甲・乙も同様であるが、高野本は、判官太夫は琴の師として姫に近づいていたと述べている。

この（5）の条にはじめて出てくる判官太夫という人物は、以後物語の上で重要な脇役をつとめているのであるが、その素姓が非常に曖昧である。そのために、横山本は娘の不義の相手とせずに、別に月の桂男というような話をつけ加えたのであろうし、また高野本も琴の師というような合理的説明を加えたのであろう。

なお、この条には、娘が家を出るに際してよんだ歌が、東大本・中川本甲乙・高野本では三首であるが、横山本だけは二首である。また歌の詞は、高野本以外の四本はほぼ一致し、高野本のみが違っている。

（6）の条は諸本ほとんど内容は変らないが、文章を比較すると、東大本と高野本とが近く、中川本甲・乙と横山本とがほぼ一類をなす。しかしまた、東大本と中川本甲との間にも部分的に類似する文が見られる。

またこの条にも、長者の娘が生れた女児を捨てて行く所に、形見によみ残す歌が記されているが、その歌も、高野本だけに語句の異同が見られる。

（8）の条で、横山本だけには、姫の夢に母親が現れて、川越で生れたばかりの姫を捨てて行った時の事情を語り、今は駿河の国守の妻になっている故、尋ねて来るようにとの告げがあ

ったという記事が挿入されている。

（9）の条でも、横山本だけは、身の危険を感じた判官太夫は、邪慳長者とその手下たちに酒をすすめて酔わせ、その隙に姫と共に逃げる。しかし後を追って来た手下たちと戦って討たれ、姫だけが逃げのびるという風に、物語の筋が変っている。ここも、横山本以外の四本では筋の運びが不自然であるので、それを物語に適した形に改めたもののように思われる。

また、この条にも、横山本のほかは、判官太夫の首がよんだ歌と、姫の答えの歌とを記しているが、その歌を比較すると、

判官太夫の歌

〈東大本〉照光、玉のすかたに、有しかと、あたの物故、ひとりふすかな

〈中川本甲〉てりひかる、たまのすかたに、ありしかと、あたのものゆへ、ひとりふるかな

〈中川本乙〉てるひかる、玉のすかたに、有しかと、あた者ゆへに、ひとりふすかな

〈高野本〉ひかりある、玉のありかに、すみしみも、あたなるのへの、露とこそなれ

姫君の歌

〈東大本〉おしゐれは、けふ行へしと、帰りみん、はゝの形見を、かけて頼まん

〈中川本甲〉おしへせし、きやうはゆくとも、かへりみん、はゝのかたみを、かけてたのまん

〈中川本乙〉おしへせし、今日は行とも、返りみん、母のかた身を、請てたのまん

〈高野本〉をしうれは、けふはゆくとも、かへりきて、ちゝのかはねを、わきてたのまん

とあって、東大本と中川本甲・乙はほぼ一致し、高野本だけがやや違っている。

（10）と（11）の条では、叙述内容に大きな違いはないが、文章は、東大本と高野本、中川本甲・乙と横山本とが、それぞれ一類をなし、両者の間にはかなり顕著な相違が見られる。たとえば、母娘再会の時の証拠となる唐の鏡に関して、東大本と高野本とは、裏に歌を書いた鏡を見せるというだけであるが、中川本甲・乙と横山本とは、二つに割った鏡を母娘がそれぞれ所持していて、それを押し合わせたところ、ぴったり合って一つの鏡となったという風に語っている。

次に、末尾の垂迹を語る条を見ても、次のようになっている。

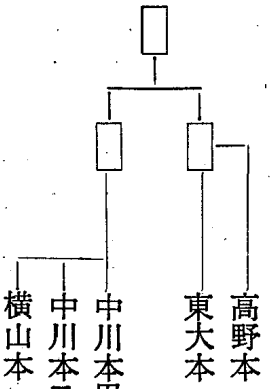
〈東大本〉（括弧内は高野本）

五万長者娘	浅間大菩薩（同）
源蔵人	総社大明神（同）
姫君	浅間の嶽（浅間の御前）
源蔵人の姫	岩かどの御前（いはとの御前）
同	大宮の玉（ママ）（三の王子）
源蔵人の侍	宮々の申口（同）
四万長者	三保の御所大明神（三保の大明神）
五万長者	富士の五所（富士の御かしよの宮）
乳母	よねの宮（同）

判官太夫　ナシ（ふくちの神）
〈中川本甲〉（括弧内は中川本乙・横山本）
五万長者娘　浅間大菩薩
源蔵人　総社大明神
姫君　山宮の神
四万長者　三保の五所大明神
五万長者　富士の麓宮（中川本乙・横山本　下宮）
乳母　よねの宮（横山本ナシ）

右のように、両者の間でそう大きな違いはないが、やはり東大本・高野本の系列と、中川本甲・乙および横山本の系列との二つに分かれていることが認められるであろう。

以上の比較によって諸本の関係を考えると、東大本と中川本甲とは関係があり、これを中心として、高野本は東大本のみと、また中川本乙・横山本は中川本甲のみと、それぞれつながりをもつことが認められる。これに、これら諸本の書写年代をも勘案すると、おおよそ左のごとき系譜を想定することができるのではないかと思う。



すなわち、この物語の原型に最も近いのは、東大本あるいは中川本甲であり、高野本は写本としての年代は一番古いが、内容としては傍系の伝本と言わなければならない。

そこで次に、東大本および中川本甲を基準として、この本地物語の内容を検討してみよう。物語の中で最も特徴的な趣向は、我が子の代りにコノシロという魚を焼いて、火葬と称して求婚者をあざむくということである。このコノシロ焼きという話は、「神道集」の「上野国児持山の事」にあり、また「慈元抄」[注5]に記載された有馬王子に関する話にも見える。まず「児持山の事」を見ると、その荒筋は次のごとくである。

(1)伊勢国の地頭阿野権守は、児守明神に祈請して児持御前を儲けた。姫九歳の時母が世を去る。権守は伊賀国の地頭加若太夫の娘を後妻に迎え、その間にも若君が誕生する。児持御前は十六歳の時、継母の弟加若次郎と結婚した。

(2)加若次郎夫婦が伊勢神宮に参詣の折、伊勢国司在間中将は児持御前を垣間見て恋となり、国に替えて姫を妻にと乞うが、にべもなく拒絶されたので、国司は父の関白に讒し、加若次郎を室の八島へ流す。

(3)国司在間中将は児持御前を奪わんとして阿野館へ押し寄せる。阿野の継母女房は鮭魚という魚を集めさせ、茅萱の中に巻きこめて焼き、児持御前が思い死にをしたので、その葬送と触れる。軍兵共はこれを聞いて早々に帰り、国司もあきらめて都へ上った。

(4)児持御前は乳母を具して東へ旅立つ。熱田の宮にて若君を出産する。七日の産立てを済ませて後、若君を懐いて旅を続ける。途中、熱田明神と諏訪明神が武士の姿に化して現れ、一行を上野国の前目代藤原成次の許へ届ける。

(5)二人の武士と成次は室の八島に赴いて加若次郎を救出し、児持御前は夫との再会を遂げることができた。

右の「児持山の事」の物語を「浅間明神の本地」と比較すると、(1)の部分は筋が全く異なっている。「児持山の事」の、申し子から実母の死去、継母の入家、継母の子の誕生という運びは、中世に多い継子物語の常套的な形式である。(注6)とくに、先に「児持山の事」の条で考察したように、同じく「神道集」の「二所権現事」との類似が濃厚である。しかし、この物語においては(2)以後の筋の展開において、継母は児持御前に対してきわめて好意的であり、継母の実子のことにもその後全く触れるところがなく、(1)の筋立はさして意味のないものとなっている。従って(1)の条は、この物語の構造の上で基幹をなす部分ではなく、単に物語の発端の脚色に、継子物の類型的な語り口を借りてきたものと解して誤りがないであろう。

次に(2)(3)の条は、「浅間明神の本地」との間に、一見相違があるように感じられるが、都から下った国司が、その地の豪族の娘に求婚したところ、娘は既に懐胎していたので(「児持山の事」では児持御前が懐胎していたと言っていないが、後に出産したとあるので、夫が流される前に懐妊していたことが明らかである)、コノシロ焼きということをして、娘が死んだと国司を欺くという点で一致している。そして「児持山の事」では、国司の横恋慕ということによって、その間の過程が自然に語られているが、「浅間明神の本地」では、娘が懐胎していた原因が不明瞭である。後に判官太夫なる者が娘の許へ通っていたことが判明したということであるが、この人物と娘との間にどんな交渉があったのかは全く語られていない。こうして見ると、両者はおそらく同一系統の伝承説話に拠ったと思われるのであるが、「児持山の事」の方には、やはり新しい脚色が加えられたと見るべきであろう。一方の「浅間明神の本地」は原説話により近いものの、物語化が未熟であったために、筋の運びに不自然なところが残ったのではないであろうか。

ここで前記の「慈元抄」所載の説話を見ると、そこでは次のような話になっている。

昔、有馬の王子が零落して下野国まで下り、五万長者の許に奉公した。ある時酒宴の席で歌をよんだことから長者にみとめられる。長者は娘を常陸国司に参らす約束をしていたところ、娘は王子と忍び逢って懐妊したので、つなしという魚を棺に入れて焼き、娘は死んだと国司を欺いた。

この話を「児持山の事」「浅間明神の本地」の二つに加え、主要人物を対照すると、

(イ)(娘の父)阿野権守(児)　五万長者(浅)　五万長者(慈)

(ロ)(娘の懐胎の相手)加若次郎(児)　判官太夫(浅)　有馬王子(慈)

(ハ)(娘への求婚者)伊勢国司在間中将(児)　下野国司源蔵人

（浅）　常陸国司（慈）

のようになる。(ロ)はそれぞれに異なっているが、(イ)(ハ)は共通していると言ってよいであろう。「児持山の事」の阿野権守については、「四方ニハ四万ノ庫ヲ立テヽ、財宝ニハ飽満タレトモ」とあり、やはり四万長者とでも名づくべき人物である。「神道集」の本地物語では、主人公を地頭の名で呼んでいる例が多い。ここも、原説話の長者を伊勢国の地頭として阿野権守と名づけたのであろう。また(ハ)の伊勢国司在間中将は、(ロ)における「慈元抄」の在間王子に通じる。その間には何か関係があったのではないかと思わせるのである。

さて、この三種の物語・説話に共通した最も重要なモチーフはコノシロ焼きの件であるが、これが室の八島の六所明神で行なわれていた神事に由来することは、近藤喜博氏が既に指摘された通りであろう。(注7)「慈元抄」では、

娘は早死したりしとて、喪葬の儀式をなして野辺に送る、棺には、つなしと云魚を入て、焼て烟を立、彼魚は焼匂ひ人を焼に似たればなり、其心を読る

東路の、室のやしまに、立煙、たが子のしろに、つなし焼らん

このかはりに焼とよめり、それよりして、このしろと云となむ、是歌故に、王子幸に逢給

とあって、この話が室の八島に伝わっていたものであることが示されている。

一方「児持山の事」では、コノシロ焼きの行なわれたのは伊勢の阿濃津であって、室の八島は加若次郎の流罪地となっており、さらに彼が妻の児持御前に送った歌として、室の八島をよみこんだ

ナクナミタ、ムネノホノホニ、タツサエテ、ムロノヤシマニ、モシホタクナリ

我ナラヌ、人モナケキヤ、積リケル、ムロノヤシマニ、タエンケムリト

という二首を記している。

また「浅間明神の本地」では「慈元抄」と同じく、下野国の五万長者の家で起った事件として語られているのであるが、室の八島という地名はどこにも出てこない。コノシロ焼きの条には、前記のように長者や国司のよんだ歌があるのに、室の八島のことはよみこまれていないのである。しかし、その長者の歌というのは

絶やらぬ、心のわたに、つみこめて、我子のしろに、つなしやくらん（東大本）

とりべのゝ、けふりともなれ、たのみつゝ、我子のしろに、つなしやくらん（中川本甲）

というもので、「慈元抄」に見える歌と下の句が共通しており、そこにつながりのあることが感じられる。

こうしてみると、三種の物語・説話において、コノシロを焼いて娘の葬送と偽り、国司の手前をとりつくろうという共通の趣向は、室の六所明神の神事に関連して成立した伝承がもとになっていたと考えるべきであろう。それが「慈元抄」所載の有

馬の王子の話のようなものであったとは言い切れないが、「児持山の事」と「浅間明神の本地」とは、そういう説話を物語の中にそれぞれとり入れたのではないであろうか。

次に「児持山の事」の（4）の条、すなわち児持御前の東への旅を語る部分を「浅間明神の本地」と較べると、やはり旅の途中での出産という特徴的なプロットが一致する。また「児持山の事」では、児持御前と乳母が阿野の津を遁れ出てから熱田へ着く迄の間を「男モ副ハヌ旅ノ道、何ツ習タル御歩ミナラネハ、道ハカチモ行サリケリ、所々ヲ歩ミ行ク程ニ、尾張ノ国熱田ノ社ニモ付下ヌ」と述べているが、物語が終った後の本地垂迹を語る条には、「阿野ノ津ヨリ尾張ノ熱田マテ、馬ニ乗セ進セテ送リ上リシ人モ神ト顕テ、其ノ馬ノ形ヲ移シテ、岩尾山ニ駒形トテ今至ト云処ニ、舎人モ馬ニ一所ニ立テ、白専馬（シラタウノ）大明神ト申スハ即是也」という一文が見える。このように、物語の中では徒歩で熱田まで行ったと語りながら、後ではそれを忘れて、その時の馬と舎人が神と現じたことを当然のように述べているのは、「児持山の事」の作者が、この物語を作るに当って利用した話には「浅間明神の本地」のように、女性が馬に乗り、男が馬の口を取って行くという語り口があったことを想像せしめるのである。ここにも「児持山の事」と「浅間明神の本地」との間には、一つの根から生じた物語という関係がみとめられるであろう。

ただ「児持山の事」は筋の運びが単純であるが、「浅間明神の本地」の方は、筋が不自然なよじれを見せている。不義の相手の男と共に家を追放された長者の娘は、川越の山中で女子を産んだが、男が水を求めにその場を離れている間に、通りかかった国司源蔵人に伴なわれて、生んだばかりの女子を捨てて先へ行ってしまう。ここから、流離の旅の女性主人公は、「児持山の事」の児持御前に当る五万長者の娘でなく、その子供の姫へと移っているのである。そして、長者の娘と関係したとされた判官太夫なる男は、山中に残された姫には父親となるわけであるが、その後のこの人物の役割は、父親というより、姫を捨てて行った母親との再会を遂げさせるための援助者といった方が適切なものとなっている。何故このような複雑な筋を構えたのか、その理由は説明できない。「児持山の事」では、夫と妻との再会を以て物語の結びとしているが、こちらではその形がとれないために、母娘の再会を以てそれに代えようとしたのだと言えなくもないが、それだけでは何としても解決をつけ難い内容なのである。「慈元抄」の有馬の王子の話も、この部分については何も記していないので、参考とすることができないのであるが、もし「浅間明神の本地」の作者が「児持山の事」の物語を知っていたとしたら、こういう不自然な形にはならなかったのではないかと考えられる。従って、この条に関しても、「児持山の事」と「浅間明神の本地」とは直接的な関係にあるのではなく、源流は同じであったとしても、別個に作り出された作品であると言うのが妥当でないかと推測されるのである。

「浅間明神の本地」は、下野国を物語の発端の場所とし、武

蔵・相模を経て、駿河国の府中における母子の再会を以て結んでいる。駿河の府中は総社のあった地であると共に、ここには浅間神社の新宮が鎮座する。「本地」では、五万長者の娘は富士浅間大菩薩と顕れ、その夫となった源蔵人は総社大明神と顕れたと語っているところを見ると、この物語は富士山麓の本宮を背景としながらも、新宮の所在地である府中を中心に長く伝えられていたように思われる。事実、横山本は冒頭に、

抑駿河の国、志豆機山に御立有、浅間大菩薩の御本地を尋奉るに

とある。賤機山の浅間大菩薩とは新宮のことであり、新宮を直接の対象として本地を語っているのである。従って、駿河の府中を以て物語の大団円の地としたのには不思議はないのであるが、発端が下野国からはじまるのは何故であろうか。

物語は下野国のどことも述べていないが、前述のごとく、コノシロ焼きのことが室の八島と結びついていたとすれば、この物語の最初の部分の場面からは当然室の八島の地が連想されたであろう。ここも下野国の国府のあった地で、総社である室六所明神が存する。この室六所明神と富士浅間明神との関係について、芭蕉の「奥の細道」に、

室の八島に詣す。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也

と記されていることが注意される。室六所明神と浅間明神とが共に祭神を木花咲耶姫と称するようになったのが何時頃からなのかは明白ではない。井野辺茂雄氏によると、富士の神を女神とする思想の淵源は古いが、祭神を木花咲耶姫と明記した文献としては「集雲和尚遺稿」の中の慶長十九年の詩に付した注が初見であろうと言われ、木花咲耶姫祭神説はおそらく室町時代末期に生じたものであろうとされている。[注8] そしてさらに、その祭神説は、浅間明神が女体であるとの信仰や、富士と三島を父子の神とする伝説と交渉があろうと述べられているのであるが、そのほかに産育神の信仰が働いていたのではないかと思われる。

かのコノシロという魚は、日本の民俗の中では産育の習俗と関連して種々の伝承をもっている。室六所明神でコノシロ焼きの神事が行なわれていたのは、産育神としての信仰が古くからあったことを示すのではないか。火中での出産を語る神話伝承をもつ木花咲耶姫が祭神とされるに至った理由をそこに求めることは可能であろう。旅中での出産を要とする「浅間明神の本地」において、室の八島がまず舞台とされたのは、産育神としての信仰によって何らかの結びつきのあった富士と室八島との関係を背景に考えることによって、その理由を理解することができるのではないであろうか。上野国の児持山明神もまた、この神社に伝わる正統の縁起によれば、木花咲耶姫を以て祭神とする。「神道集」の「児持山の事」がコノシロ焼きのことや、室の八島を物語の中にとり入れているのも、同様の事情によることを推測させるであろう。

次に、はじめに挙げたように、富士浅間明神に関しては、古くよりこの地方に伝わっていた竹取翁説話による縁起が存し、

「神道集」もそれによって「富士浅間大菩薩事」の一章を立てて、本地を説いている。それに対して全く内容の異なる本地物語が作られた事情は何であったのであろうか。「浅間明神の本地」の成立は常識的に考えれば「神道集」より遅れるとすべきであろうが、それも証拠があるわけではなく、右の疑問については何ら推定の手がかりを得ていないのであるが、一つの臆測を述べれば、「神道集」系統の本地物作者と、この「浅間明神の本地」作者とは、宗教的に系統を異にしていたのではなかったか。富士浅間神社の社僧は、江戸時代においては古義真言宗の別当宝幢院を中心に組織されていた。中世における状況ははっきりしないが、大日嶽に存した大日堂には、明応四年の銘文のある大日像があったという。大日如来を本地仏とする本地堂があったことからすれば、室町時代から真言系統の修験が富士の信仰に関与していたと考えてよいであろう。ここに、天台系統の修験の手に成った「神道集」の本地物語に対して、「浅間明神の本地」は真言系統のものではなかったかとの推測が生れるのである。「神道集」が東国の諸社にとくに力を入れたことは明らかに認められるが、それにしては富士に関しては、その取り上げ方が小さい感を受ける。富士の縁起を説くに、旧来の説話を以て間に合わせ、新しい本地物語を創作しなかったことも、もしかしたらその辺に理由を求めることができはしないかと思われる。

この本地物語の伝本には、絵巻や奈良絵本の類が見られない。伝本から見ると、駿河の地方を中心に伝写されていたようである。写しとして最も古い高野本は、この類の物語としては珍しい枡形本で、本文も修辞の上で技巧を加えたところが見られ、知識人の筆に成ったのではないかとも思わせるが、この物語がいわゆる御伽草子として広まった形跡は認められない。同類の「児持山の事」の方は、それ自身は御伽草子化されていないが、「明石物語」や「堀江物語」など、その系統を引く御伽草子作品を見ることができる。もちろん、これらの作品と「浅間明神の本地」との間にも類似はあるが、直接的には「児持山の事」の方と関係が深そうである。

(注5) 孝道に関する教訓書。奥書によれば永正七年の成立。「群書類従」雑部所収。

(注6) 拙稿「中世における本地物の研究(三)」(斯道文庫論集第十三輯)。

(注7) 近藤喜博氏「神道集について」(「神道集東洋文庫本」解説)。

(注8) 井野辺茂雄氏「富士の歴史」。

浦島太郎

御伽草子として最も有名な作品の一つで、伝本も多いが、ほとんどの諸本が、浦島太郎は丹後国に浦島明神と顕れたことを述べ、本地物の形式になっている。

周知のように、浦島伝説は「雄略紀」をはじめ諸書に引かれ、古くから文人の筆にもかかっている。これが丹後国宇良神

社の縁起となったのが何時の頃からかは明らかでないが、宇良神社には、室町初期あるいは南北朝まで遡るともいわれる古絵巻が伝わる。この絵巻は画図だけで詞書はないが、普通の浦島物語の筋を追った画面の後に、神座に供饌の図や、田楽・相撲・流鏑馬・競馬・女騎馬等の絵が出ていて、浦島明神の縁起絵であったことが示されている。おそらく詞書は別にあって、この絵巻は縁起の絵解に使われたのであろう。

国学院大学大学院臼田ゼミナールが調査したところによると、(注9)宇良神社には右の絵巻のほかにも諸種の縁起書が存する。最も古いものは永仁二年書写の「浦嶋子伝記」で、これは「群書類従」所載の「続浦嶋子伝記」と同じ内容である。その他は近世の書であるが、その中の一種、元禄九年に浦島社別当平野山来迎寺の住持、法印真南が記した「浦島子口伝記」には、浦島五社の本地を

本神中　嶋子本地正観自在菩薩
左脇　浦嶋太良（嶋子の父）本地毘沙門天王
同次　母御前本地阿弥陀如来
右脇　竜女本地十一面観音
同次　今田三良（浦嶋太良の末弟）本地薬師如来

と述べていて、完全に本地物形式を整えた縁起になっていたことが知られる。

浦島物語は室町時代から盛に絵巻物に仕立てられていたらしい。「考古画譜」に、

浦島双紙一巻（本朝画図品目、書画筆者未詳）
同　一巻（絵飛鳥井栄雅女一位局、詞後柏原院勾当内侍）

同　残欠一巻（後土御門院勾当内侍書画一筆、下巻逸）

と出ているが、これらは今存否未詳である。

次に現在知られている諸本を列挙すると左の通りである。

㈠日本民芸館蔵〔室町後期〕写絵巻　一軸

現存本の中では宇良神社の絵巻についで古いが、上巻を欠き、後半のみを存する。料紙の高さ一八糎の小形の絵巻で、絵は童画風、本文が画面に入り込みになっている。「室町時代物語大成第二」所収。

この絵巻の本文は、㈢以下の諸本に較べて非常に簡素であると共に、地の文と、人物の会話の詞とが、はっきり区別されないままにつらなっているのが特徴である。たとえば次のごとくである。（会話の詞の部分は「　」で括ってみた）

「ふるさとへしのひゆきても、やかてこそまいり候はんつれ、さのみなけきたまひそ」せんりをへたつる、うみのうへなれとも、ほうらいのふねなれは、一ときはかりにゆくそ、ふしきなれ

「この山のあなたや、ふるさとちかく見ゆらん、うれしやく」

やうく、わかふるさとへあかり、「むかし人にたつね申候、このうらに、むかしうらしま太郎と申たるものにて候、そのゆかり御いり候や」

「さてもく、ふしきなることをおほせ候、そもく、うらしま太郎の事は、まことしからぬ事にて候、はや七八百ねんさきの御事にて候」

九十九になり候うはこせ、たちいてゝ申候やう「さてく、ふしきなる事にて候、うらしま太郎の事は、いひつたへにこそきゝ候へ、さてもくふしきなれく」

会話を中心に物語の叙述が運ばれ、その間に所々地の文がはさまっている。また終りの二節のように叙述の重複している所も見られる。このような文が画面の中に入りこんでいるのを見ると、この絵巻は絵の方に中心があって、文はその説明のためのものといってよさそうである。

㈡高安六郎氏旧蔵奈良絵本　一冊

横山重氏によって「室町時代物語集第五」に収められたが、原本は戦災をうけた。その解題によれば寛文ごろの大形奈良絵本である。本書の本文は㈠の古絵巻の系統を引くようである。たとえば、竜宮の乙姫が浦島に四季の体を見せる条に二首の和歌を記すのは、㈠の古絵巻とこの高安本だけであって、和歌の語句もほとんど一致する。また、乙姫と浦島の離別の際に交す和歌は諸本みな異なっているが、高安本には浦島の歌は欠いているものの、乙姫の歌は古絵巻と一致する。そのほか、玉手箱をあけた浦島が老衰して命終った時、この様子を見ていた修行者が跡を弔ったという記事も、高安本のほかには古絵巻に見られるだけである。このように、㈠の古絵巻と高安本とは共通した特徴をもっている。ただし、叙述は高安本の方が古絵巻よりも全体にやや詳しい。古絵巻のように、地の文と絵詞とが混合した形ではない。おそらく、古絵巻と高安本とは祖本を共にする伝本であろうと思われる。

㈢日本民芸館蔵〔室町末期〕写絵巻　一軸

㈠の古絵巻についで古い絵巻である。これも高さ一五・五糎の小形絵巻で、画風も、画文入りこみになっている点も、前掲の絵巻によく似ている。「室町時代物語大成第二」所収。

この絵巻の本文は、㈠の古絵巻よりさらに簡素になっている。ほとんど物語の筋を述べる程度である。和歌も、浦島と竜宮の女房との離別の時の歌二首だけである。この本だけは、結びで浦島と女房が神と顕れたことを述べていない。本文の上では、㈠の古絵巻との関係を認めることはできない。

㈣大東急記念文庫蔵〔近世初〕写絵巻　一軸

本書は、もとは袋綴の大形の冊子本であったものを改装した絵巻である。挿絵は古雅な奈良絵で、本文が挿絵の中に自由に散し書きに記されているなど、初期の奈良絵本の様式を示している。「室町時代物語集第五」所収。

本書の本文は、㈠㈡の絵巻とは対照的に、叙述の内容が非常に委細で、和歌の数も最も多い。とくにくわしい所を挙げれば、

(1)冒頭に父の浦島太夫のことを記し、太郎は貧窮の中で老父母に孝行を尽したとある。

(2)亀の変じた女房が太郎を迎えに舟に乗って現れた時、女房は太郎の父母や妻に紺紙金泥経一巻を与えたとある。また

太郎が妻子と別れを惜しむという記事もある。

(3)亀を南海の沙迦羅竜王の娘の竜女といい、その住所を不老不死の蓬萊山とする。

(4)竜女と太郎の別離の場面に、贈答の歌を九首まで記す。他本は二首か三首である。

(5)故郷へ帰った太郎に、百歳ばかりの翁が父母や妻子の焦れ死にをした様子をこまかに語る。太郎が翁の教えのままに山の中へ入ってゆくと石塔があり、その脇に父母の姿が石となって立っていたとある。

のごとくである。なお終りに太郎を浦島明神と斎いたことを記した後に

かやうに、さうしにとゞめたまふ事も、をやかう〳〵なりとて、そのときのちよくしには、たいこのもんせき、ゆきたまふとて、このさうし、たいこよりいてたるなり、人〻よく、おやかう〳〵をなすへきものなり〳〵

という一文が添えてある。こういう文も他本には見えない。ここに醍醐寺の名が出てくるが、それがどのような意味をもつのかは明らかにすることができない。ただ前記の宇良神社に伝わる縁起には、真言宗の僧侶の執筆したものが見られる(注10)。宇良神社は中世以来真言宗の管理下にあったらしく、この物語に醍醐寺が関係したことは考え得るところである。

以上のように、この大東急本は絵柄からも、本文の性格からも、(一)(二)の古絵巻とは非常に対照的な特徴を見せている。本の製作者あるいは享受者の違いを思わせるのである。

(五)禿氏祐祥氏旧蔵〔近世中期〕写本　一帖

装幀は奈良絵本風であるが、挿絵を除いたり、後に入れる予定であった跡はなく、もとからの写本である。本文巻頭に「うら嶋太郎物語」の内題がある。「室町時代物語集第五」所収。

本書は時代の下った写本で、本文は寛永ごろの丹緑本や流布の御伽草子本に近い。しかし、それらの刊本の本文よりも委細な所が多く、文章もよく整っていて、刊本を写したものとは思われない。刊本系に先立つ古い形を伝えた本であるかもしれない。全体として言えば、(四)の大東急本ほどではないが、(一)(二)の古絵巻よりはずっと叙述が丁寧である。

(六)東大図書館蔵天保九年写本　一冊の内

本書は「物くさ太郎」「のせさるそうし」と共に「みくさ物語」と題して一冊の内に収められている。本文の所々に「エノ所」という註記があるので、奈良絵本によって写したのかもしれない。本文は(五)の禿氏本とほとんど同文である。

(七)〔寛永〕刊丹緑本（横山重氏旧蔵）

本書は稀覯の本で、横山氏が「室町時代物語集第五」の解題の条に紹介された本のほかに、まだ同版本に接することを得ない。それによれば、本文は次の御伽草子本と用字の差違があるだけで、語句に異同を見ないとのことである。

(八)御伽草子本

本書の本文は(四)の禿氏本のそれにほぼ沿っていて、同文の個所も多いが、また少しずつ簡略になっている所も多く見られるほか、やや長文の文が欠けている部分が五個所ほど数えられ

る。それらの個所を較べてみると、いずれも禿氏本の方が叙述が整っている。この御伽草子本や㈤の丹緑本など刊本系統の本文は、㈣の禿氏本系統の古い写本をもとに、それを適当に縮めたものと考えるのが妥当であろうと思われる。

㈨天理図書館蔵写本　一冊
㈢横山重氏蔵絵巻　一軸
㈡実践女子大学図書館蔵写本　一冊

以上の三本は御伽草子本とほとんど変るところのない本文を有している。

右のように、この作品は伝本の形態、本文の性格や絵柄などから見て、相当広い階層の間に流布していたことが窺える。右の諸本のうち、どれが古い形態の本文を伝えるのかは断定し難いが、通観すると㈤の禿氏本系統が最も標準的な本文といえるであろう。そして一方に㈠㈡㈢のごとき簡素な本文をもつ伝本があり、一方には㈣の大東急本のように非常に叙述の委細な伝本が存在する。しかし物語の内容においては、そう大きく変っている所はない。そして㈢の絵巻を除いて、すべての本が結びで浦島太郎の神としての垂迹を述べているところから見て、この物語は宇良神社の縁起談として伝えられていたものと考えてよいであろう。とくに禿氏本では結びに次の一文が見られる。

むかしかいまにいたるまで、このみやうしんにいもせの事をちかひけるに、かなはすといふことなし、さるによつて、このさうしを一たひよめは、えんなき人はえんをむすひ、えんある人はちなみふかく、めてたかりけるためしなり

このような言葉は、男女が恋の苦難の末に神仏と顕れ、衆生を済度するという、本地物に最も多く見られるところである。

しかし、この物語の内容は、恋する男女の苦難を語るというものではなく、妹背の道の守護神としての資格を得るにはそぐわない話である。この作品の場合は、古くから知られていた浦島説話の主人公が、神として祀られるようになったところから、自然に本地物の形式にはまってくることになったと見るべきであろう。本地を説くことを目的に創作された諸篇とは、性質を異にするというのが適切であろうと考えられる。

（注9）国学院大学大学院臼田ゼミナール編「民俗と文献」第一輯―若狭・丹後地方―。

（注10）前掲「民俗と文献」に翻刻紹介されている「浦嶋子口伝記」は、元禄九年に浦島社別当、平野山来迎寺の住持法印真南の記したものである。来迎寺は仁和寺の末寺で、丹後では成相寺の配下にあったという。

小男の草子

五条天神の本地を語るという形式をとるこの作品には、室町末期ごろからの絵巻や奈良絵本が数多く伝存する。本文の異同もかなり複雑であるが、大別すると、次のように二種類の系統に分けられる。

甲類

(1)横山重氏蔵〔室町末〕写　絵巻　一軸

本書は、いまは巻子本になっているが、もとは冊子本であったのを改装したものである。挿絵は比較的淡彩で、画面の中に人物の名や科白が書き入れてある。「室町時代物語大成第四」所収。

(2)天理図書館蔵〔室町末〕写　絵巻　一軸

本書の本文は、(1)の横山本絵巻とほとんど同じである。やはり画面に絵詞が記されている。「天理図書館善本叢書　古奈良絵本集一」所収。

(3)清水泰氏旧蔵絵巻　一軸

本書は高さ一七センチほどの小形の絵巻で、箱書に、詞は西冷泉為祐卿筆、絵は土佐光祐の門人並河光欲という極めが記してある。「室町時代物語集第五」所収。

(4)守屋孝蔵氏旧蔵奈良絵本　一冊

「室町時代物語集第五」所収。

(5)岩瀬文庫蔵奈良絵本　一冊の内（丹緑横本「なゝくさ草紙」と合綴）

(6)天理図書館蔵奈良絵本　一冊

(7)高安六郎氏蔵〔室町末〕写　横形奈良絵本　一冊

本書は横形の奈良絵本としては最も古色のある良い本である。本文と挿絵とが入りこみになっている。昭和五年に稀書複製会から複製本が出されたほか「室町時代物語集第五」「室町時代物語大成第四」に収めてある。

(8)高安六郎氏旧蔵奈良絵本　一冊

(9)岡村槐軒氏旧蔵奈良絵本　一冊

右の(8)(9)の二本は「室町時代物語集第五」に解題が載せられている。

以上が甲類の諸本であるが、これはさらに、(A)(1)～(6)の諸本と、(B)(7)～(9)の諸本との二種に分けることができる。物語の大筋はさして変らないが、(B)は(A)に較べて叙述が著しく簡略である。二、三の例を挙げれば次のようである。

㈠小男が京へ上り、宿を借りる条。

〈A横山本〉きやうへつきしかは、つしこうちにたちやすらいて、物申さんといはんとおもふに、たかくいはゝ、せいにもにす、こゑのたかきとて、人のわらふへし、又ひきくいはゝ、おさあひ物とやおもふらん、とにかくあんしわつらひけり、されとも、おとこは、なにとなくかうなるこそよけれと思ひて、いかにもたからかに、やと申さんといふ

うちより人いて、たれ人そ、いつくよりそと見れは、人は見えす、ほとりの草むらのかけに、すこしうこく、なにやるらんとおもひて、よくゝみれは人なり、あらいたはしや、いたけけや、ちいさきこおとことは、かやうのことかやとて、京わらんへ、あつまりてまほりけるほとに

こおとこおもふやう、あなあさましや、わか身いかなるさきの世のしゆくしうにや、おなしにんけんにありなから、かほとまてちいさくあるらんとおもひて、一しゆかくなん

さきの世に、いかなるつみの、むくひかや、しやくにもたらぬ、身とむまれけん

かやうにうちなかめ、我身をうらみ、（つゝましくイ）つらましくおもひて、

たゝすみける

〈B高安本〉さて、みやこをしつかにけんふつして、せこそちいさくとも、やとなりとも、大きなるやとをからんとおもひ、上下をたつぬるに、大きなるいへのかとにて、大おんしやうにあん内をこう

うちよりおんないてて、たそ、あらけなきこへかなと、いてゝみれは、たけ一しやく、よこ八寸のおとこなり、何事そと申候へは、おんこくの物にて候、やとのしよまふにて候、こなたへいらせたまへとて、うちへよひいれて、きやうにひかすをふるほとに

右のように、A横山本の傍線の部分に該当する文が、B高安本にはなく、また横山本の小男の述懐の歌も高安本には見えない。つまり小男の心情を述べる言葉が（B）の方には欠けているのである。

なお右の文の後、（A）の諸本では、小男は其処をたち去って、また別の所へ行き案内を乞う。その家で主の女房に奉公を許され、毎日清水山で松の葉をかいていることになるのであるが、（B）では、右の文にあるように、最初の家に宿をとり、ある時清水へ参詣の砌、上臈女房の目にとまって、そこに奉公をすることになり、清水山の松の葉をかくという風に、筋もやや違っている。物語はその次に、小男が清水山で参詣の美しい女房を見て恋となる条に進んでゆくのであるが、（B）の語り方だと、清水で女房に会うという話が二度続くことになり、筋の運び方としては重複の感がある。

(二)小男が清水詣での上臈女房を見て恋となる条。

〈A横山本〉その日より、こおとこ、心そらにふししつみ、露のいのちもいととなん

我こひは、しほひに見えぬ、おきの石、人こそしらね、かわくまもなし

あはれ、もろともに、そひにしもなんと思ひ（そひまいらせたくおもひイ）、やるかたなきまゝに

もろともに、あはれとおもふ、人もかな、つゝむこひしき、うきをかたらん

しのひて、かやうになかめしかは、しうの女はう、きかせたまひて、あはれなりけることかな、さやうに身をいたつらにくらさんことも、ふひんなれはとて、すわうとのと申女はう、しひて、かのものによくとはせたまへは、こおとこ、よにはゝかりにおもひけれとも、さすかつゝまれぬことなれは、はしめよりおはりまて、こまゝ〳〵とかたるを、すはう殿きかせたまひて、さてあるへきならねは、あるへきまゝに、しうのしやうらうへかたりたまへは、あはれなり、むかしよりいまにいたるまて、こひといふあるなれは、人のおもひをやはらけ、あはれみをなすこそ、うき世のならひ、こんしやう、こしやうのためなれは、さらは、まつこゝろをやはらけたまへと、ありけれは、やかて、すはう殿、こおとこにおほせあるは、いかに心のうちのことをかきて、文をまいらせよ、つたへてとらせんと、ありけれは

〈B高安本〉そのまゝひれふして、さら〳〵物をもきゝいれ

す、なく計なり、さて内のにうはうこれを見て、こほとこかありさまは、何共しれぬていなり、しせんこいのこゝろならは、みつからにかたれ、かなへてとらせんとありけれは、此ことはにちからをゑて、をきあかり、いまは何をかつゝみ候へき、きのふのくれほとに、いつものことく、まつのはをかきにゆき候へは、としならは十七八かとおほしき上らうの、すかたをみれはあきのつき、かたちははるの花、三十二さうのかたちをけんしたりし、いかにもいつくしき上らうさまの御とおり候を、たゝ一め見て、それよりこいとなりて、むね(かなひ候はすは一日も)のくるしさ、よのつねならぬことなり、此ことよりすてゝならは、いのちはありかたしとて、又なみたをなかし、あしすりしてそなきいたり、あらいたはしや、さらは、のそみをかなへてとらせんか、ところをしりてこそ、人をもやるへしといゝたまへは、いや、此ちかきほとの、ついちかとしたるところにてさふらふ、さらは人をつかはしてとらせん、をもはんことをいへとある

この条でも、Aでは二首の古歌を引いて小男の心中を述べているが、Bにはそれがない。また、Aでは主の女房は、すはう殿という侍女を通して小男にわけを聞くのであるが、Bの方は、主の女房が直接小男に問うている。

㈢小男が上臈女房に逢う条。

〈A横山本〉かの女はう、たそかれときにたちたまへは、見えさりけれは、おほつかなくおほえて、せんさいのほとりを御らんすれは、うへ木のいとけなきしたに、すこし物かけのうちにうこく、なにやるらんとあやしく、もしやへんけの物か、うつゝなくおほえて、いかなる物なりとも、こゝろあれはこそ、せんさいのうへ木の花をたよりとはすれ、なさけあるらんとおほしめして、いかに、あれに御いり候、人にても候や、こなたへいらせたまへと、よひたまへは、こおとこ、うれしくおもひて、とり〳〵かくなん

しのふれは、身はやせにけり、くれなゐに、千しほの色に、いかていてなむ

あふとても、うれしくもなき、こよひかな、あすのわかれを、かねておもへは

かやうにとり〳〵、とし久おもひより候へは、君も御心をやはらきて、やさしくおもひよりたる物かなとて、ふかくこゝろをかけたまひけるとかや

かやうにうちなかめて、ゑんのうへゝあからんとはすれとも、ゑんは身よりもたかけれは、のほりゑすありけるに、女はうたちいくして(心やさしくて)、手をとりて、ゑんへそひきあけたまふ、こゝろのうち、世にためしなきものゝすかたかなと、あさましくおもひなから、かみへひきあけたまひけり

さて女はうは、かやうの物に、すこしのちきりなりともむすふへきかとて、しやうしをあらけなくひきたて、うちへいらせたまひけれは、彼こおとこ、心のほかにて、これよりかへりなんもよしなしとて、こゝあけさせたまへと、たゝけとも女はうあけたまはねは、はや夜もあけかたになり行は、からすなともつけわたりけるほとに、かやうにゑいしけり

夜もすから、しやうしやりとを、たゝくまに、みねにからすの、なきわたるかな
あくるかと、たゝくつまとを、あけもせて、心のほかに、夜こそあけけれ
とうちなかめ、かへらんとせしを、女はうきゝたまひて、たとひまゐんのものなりとも、かほとに色ふかく、なさけあるものを、いかてむなしくかへすへきとて、しやうしをほそくあけ、よひたまへは
〈B高安本〉さて、まれ人はいつのしふんにこんとおもひ、まちかねてをわしましけるに、何やらん、せんさいに物のうこくをみれは、たけ一しやくほとなるいき物なり、はしちかくいてゝみれは人なり、さては、こよいのやくそく人はこれなりとおもひ、ゐんのしやうらう、かいつかみてをきて、われはそらむねやみて、しとみ、しやうし、たてまわして、うちへ入たまふ、こをとことりあへす
三日月の、ほのかに見へて、いりぬるは、そらやみとこそ、いうへかりけり
かやうによみけれは、にうはうきゝたまいて、さても、なりにもにぬ、うたのおもしろさよとて、しやうしをあけて、うちに入たまふ
右のように、前半の、尋ねてきた小男を女房が縁の上に引き上げるまでの叙述が、(B)は(A)に較べて非常に簡略である。やはり、女房や小男の心情の描写が述べられていないことが認められる。しかし、次の、女房が小男の姿に嫌気がさして内へ隠れてしまった時、小男がよむ歌は、(B)の「三日月の」の方が機智に富んでいて、この場面に適切である。後掲の乙類の伝本でも、この場面では「三日月の」の歌の方が出ているのを見ると、あるいは(B)系統の方が古い形を残しているのではないかとも考えられるのである。

さて、以上の甲類の諸本に対して、次の乙類とした二本は、内容に相当大きな違いの見られる異本である。

(1)天理図書館蔵慶長十二年写絵巻　一軸
高さが一七センチ足らずの小形の巻子本。奥書に「ひろしまにてかきうつす也　慶長十二年ひのとのひつし二月五日」とある。「天理図書館善本叢書　古奈良絵本集一」「室町時代物語大成四」所収。

(2)早稲田大学図書館蔵〔近世初〕写　絵入写本　一冊
挿絵は奈良絵風であるが、鳥の子や間似合の料紙でなく、楮紙に写してある。「室町時代物語集第五」所収。

早大本は天理本よりも遙に叙述の詳密な本文を有するが、物語の筋はほとんど同じである。この乙類の二本の内容は、甲類と較べると次のような相違がある。

㈠甲類では、小男は田舎から奉公のために都へ上ったとある「横山本・天理本・守屋本・岩瀬本等は山城国くろもとの郡、清水本は同国くせ郡、高安本系統は大和国よりまの郡とする)が、乙類では、はじめから都の九条殿の家に仕えていたとしている。また、この小男を乙類の天理慶長本は「ひき人」早大本は「ひきう殿」と記している。「ひき人」は「ひ

きうど」で、早大本はそれを誤って「ひきうどの」としたように思われる。

(二)甲類では、小男は清水山で松の葉をかいている時に、参詣の美しい女房を見そめて恋となるのが、乙類では、関白の邸で上野の局という上臈女房を見て恋の病となったとある。

(三)甲類では、小男の恋が成就して女房と結ばれたところで物語が終る。しかし乙類の方はその後に、上野の局が日頃信仰する清水に籠り祈願すると、夢中に打手の小槌を授かり、それで小男の腰を打つと七尺余りの美丈夫となった。小男は関白殿に見参し、筑紫国を賜わって夫婦共にその地で栄えたという記事が加わっている。

(四)甲類諸本の多くは、結びで小男は五条の天神、女房は聖観音(高安本は塞の神)と顕れたとする。清水本や岡村本には、そのような結びがないが、どちらも年代の新しい本であるから、甲類は、本来そういう垂迹の結びを有していたとすべきであろう。それに対して、乙類には二本ともに、小男や女房が神仏と顕れたとする本地物式の結びは述べられていない。慶長本のような古い伝本がそうなのであるから、おそらく乙類の形態は、これが本来なのであろう。

以上のように甲類と乙類との間には、物語の内容にかなり顕著な違いが見られる。しかし、一尺余りの小男が、和歌の才能によって都の上臈女房の心を動かし、望みの恋を成就するという物語の主題においては全く一致するのであるから、この甲乙二類は、どちらかが一方の改作といってよい関係にあるものと考えられる。

そこで、前記の甲乙二類の間に見られる相違について考えると、最も大きな違いは、甲類は小男のままで終るのに対して、乙類は末には清水観音の利生によって丈が伸び立派な男子となったと述べている点である。これは常識的に考えれば、乙類の方が物語としての結末を飾るために新につけ加えたものと言えそうである。甲類においては、小男が清水山で松の葉をかいている時に女房を見そめたとしており、その女房と結ばれたことが清水観音の利生であるとは説いていないが、それを感じさせる趣向が構えられている。そこから乙類は、清水観音から打出の小槌を授かって丈が伸びたという利生談を加えたのではないかと考えられるのである。その場合、甲乙両類の間で共通する和歌は、乙類の

三か月の、ほのかに見へて、かくるゝは、そらやみとこそ、いふへかりけれ(慶長本、早大本も同じ歌であるが、ややくずれている)

の一首が、甲類のうちで高安本系統の諸本に存するだけである。従って、乙類が改作のもととした本は、甲類の中でも高安本系の伝本ではなかったかと思われる。

諸本の関係を以上のように考えれば、この「小男の草子」という作品は、元来五条天神の本地を語るという形式のものであり、本地物の一種ということになる。この物語が五条天神と結びついたのは、五条天神の祭神が少彦名命とされていたことによるのであろうが、佐竹昭広氏はさらに、同じ天神の名から北

野天神の信仰も重なっていたとして、天神が和歌・連歌の神であることと、当時菅原道真が背のたいへん低い人であったという伝えが信じられていたことを挙げ、小男の身でありながら、異常な和歌の才能だけで恋を成就し、成りあがることができたのは、かれが、文学の才能と小さなからだを、二つながらかね備えた五条天神の本地だったところにあると言われている。(注11)

甲類の古い本には、

もろ〳〵の一切のしゆしやうの、ねかひをみてたまへり、ことに恋せん人あらは、ねかいをかなへたまはむとの御せいくわんなり〈横山本〉

さていまのよまでも、こいをする人は、てん神とさいのかみとに、きせい申せは、たちまちにふうふの事は、女をとこともにかなふなり〈高安本〉

という文があって、「貴船の本地」などと同じように、男女の道を守る神としての利生を説いている。恋のために苦労をした末に神と現じた故に、恋する人の望みを叶える力をもっているという説き方は、まさに古い本地物に共通する思想である。しかし、この物語での、小男の恋が成就する過程は、古い本地物とは全く異なっていることに注意しなければならない。本地物に見られる通型は、愛する男女が他からの迫害によって艱難辛苦を経た後に、神仏の援助によって幸福をかち得るというものである。しかし、この作品における主人公は、自身の才能と機智によって相手の心を次第に引きつけ、ついにそれを手に入れるに至ったのであって、神仏の前生を語る物語としては、古い本地物とは異なる方向へ向って歩み出したものと言うべきであろう。それは、やはり形式的には本地物の形をとる次項の「物くさ太郎」に通じる世界であるが、このような作品をも本地物となし得るかどうかは疑問としなければならない。

なお「小男の草子」と全く同じ題材を扱った作品に、御伽草子本二十三篇の一つとして流布した「一寸法師」がある。この「一寸法師」については「小男の草子」よりも古い作品と見る説もあるが、(注12)「一寸法師」には、御伽草子本のほかには、写本にしても版本にしても古い伝本を見ない。写本としては、

横山重氏蔵「文鳳堂雑纂八十三」　一冊

の中に「子やす」と共に収められているものを見ただけである。その本文は御伽草子本と全く一致しており、御伽草子本を写したものとしか考えられない。「小男の草子」には慶長頃の古い絵巻や奈良絵本がいくつも存し、本文の異同も大きいのに対して、御伽草子本以前の古い写本を見ず、本文の系統も全く単一である「一寸法師」が、それに先立つ古い作品とは思えないのである。

内容の上から見ても、主人公の一寸法師が住吉明神の申し子とされている点は中世的であるが、本地物としての結びはない。何よりも大きな違いは、一寸法師が三条宰相殿の姫君に対する恋を成就することができたのは、和歌の才能によってではなく、きやうがる島の鬼を退治した武勇のためとなっているが、ここには「小男の草子」よりも内容が一段と童話化されていることが認められるであろう。そして、一寸法師は鬼から得

た打手の小槌によって背が大きくなったという結末を有しているところからすれば、この作品は「小男の草子」の乙類本をうけて、それを改作したものと言うのが適切ではないかと考えられるのである。

(注11) 佐竹昭広氏「下剋上の文学」。

(注12) 岡見正雄氏「天理図書館善本叢書　古奈良絵本集一」解題。

物くさ太郎

これも御伽草子の代表的作品であるが、諸本ともに、男女主人公が末には神と現じたとして、本地物の形式をとっている。本作の伝本としては、寛永ごろの丹緑本をはじめとする版本と、それと同系統の本文を有する写本だけしか知られていなかったが、近年、信多純一氏によって別系統の絵巻が紹介された。そこで、本作の諸本は次のように、絵巻系と刊本系との二類に分けられる。

(絵巻系)

(1)大阪女子大学蔵絵巻　一軸

信多純一氏が「松蔭国文資料叢刊4　古本物くさ太郎」に全巻の影印および翻刻を付して、くわしく紹介された。もと桝形の冊子本であったものを巻子本に改装した本で、中間と巻末に欠落がある。外題、内題ともになく、箱書に「物臭太郎絵巻」とある。挿絵は二十四図あり、画面には人物の名や科白など、いわゆる絵詞が記されている。絵柄は「小男の草子」の古い絵巻などと似通っており、信多氏が推定されたように、慶長期を下らぬ頃の写しと見てよいであろう。

(2)国会図書館蔵嘉永三年細野要斎写本　一冊

本書は奥書によると、寛延二年に文錦堂冨梅の書写した本を、嘉永三年に尾張藩の儒者細野要斎(忠陳)が転写し、「善光寺道名所図会」所載の物臭太郎物語の本文によって校合を加えた本である。題簽に「懶太郎物語」と記し、内題には、巻頭に「物くさ太郎　巻之上」、中間に「巻之下」とある。

本書のもとになった本は上下二巻であったと思われる。

右二本の本文は、次の刊本系に対して、顕著な特徴を共有している。(2)の国会本は従来誤脱の多い本として、さして注意が払われなかったのであるが、(1)の古絵巻が発見されるに及んで、それと同類の本文であることが判明したのである。しかし、信多氏がくわしく両本を比較した結果言われたように、単純に国会本は古絵巻の系統というのではない。両本ともに誤脱があって、たがいに補い合う個所が多く、一つの祖本から分岐した本と言うべきであろう。大阪女子大本は前記のごとく、もとの形は絵入の冊子本であるが、絵の前後に白紙部分が多出することや、連続図が見られる点から、その祖本は絵巻であったろうと推定されている。国会本も、本文にかなり多くの改行があり、女子大本との比較によって、それは所拠本に絵のあった個所と考えられる。従ってこの二本の共通の祖本は絵巻であったとする信多氏の説は間違いないとしてよいであろう。

（刊本系）

(1)寛永頃刊丹緑本「おたかの本し物くさ太郎」　二冊（横山重氏・東洋文庫蔵）

同右後印本（東大図書館・東京教育大学図書館・国会図書館蔵）

横山重氏所蔵の丹緑本下巻には「おたかの本地　下」の原題簽がある。後印本では題簽が「物くさ太郎　上（下）」と改められている。また初印の丹緑本と後印本とでは、上下の巻分けの個所が異なる。

(2)寛文五年松会刊「ものくさ太郎」　三冊（横山重氏・大東急記念文庫・国会図書館・東京教育大学図書館等蔵）

題簽は「新板絵入物くさ太郎　上（下）」。東北大学図書館には刊年だけを削った後印本がある。

(3)〔元禄宝永〕鱗形屋三左衛門刊「物くさ太郎」　一冊（横山重氏蔵）

(4)貞享四年鱗形屋孫兵衛刊「物倦太郎」　上下合一冊（ノートルダム清心女子大学蔵）

(5)同右西村伝兵衛刊「物倦太郎」　上下合一冊（横山重氏・国会図書館蔵）

(6)大東急記念文庫蔵奈良絵本「おたかのほんち」　二冊

(7)岡村槐軒氏旧蔵奈良絵本「おたかの本地」　二帖

(8)岩瀬文庫蔵奈良絵本「多賀の本地」　三帖

(9)高安六郎氏旧蔵奈良絵本「おたか」　二冊

(10)国会図書館蔵奈良絵本「物くさ太郎」　二冊

(11)御伽草子本

(12)東京大学図書館蔵写本「物くさ太郎」（天保九年写「みくさ物語」一冊の内）

(13)内閣文庫蔵天保十一年写本「物草太郎物語」（「墨海山筆第四十六冊の内）

(14)穂久邇文庫蔵写本「懶太郎物語」　一冊

以上の諸本は、部分的な語句の小異同はあるが、同一系統の本文といって差支えない。強いて分ければ、(1)の丹緑本系と、(11)の御伽草子本系との二種となる。(6)～(10)と、(12)～(14)の各写本は、前者は丹緑本系、後者は御伽草子本によって、それぞれ本文を作った本といってよいであろう。

さて、そこで右の絵巻系と刊本系との関係であるが、それについては、信多純一氏が両者の本文の詳細な比較を通して、刊本系本文は絵巻系本文をもとに成立したことを立証されている。氏の結論だけを引用させて頂けば次のごとくである。

刊本系本文は一見、〔絵巻系とは〕異なった系統の本文のごとく思われるが、子細に検討すれば同系統であると言い得よう。女子大本・国会本両本にまたがる本文をもとに成立しており、どちらかと言えば国会本の祖本により近い本に拠って成立しているもののようである。そして、比較的大きい異同が絵巻系との間にある時、すなわち刊本系の本文がとりわけ多い個所には絵解の科白の存することが判り、絵巻系の本文が多い個所では科白の本文化が辿れるなど、絵解をともなった絵との密接な関連があることが判明する。

要するに、現存刊本系は、多くの科白をもった絵の描かれた写本を刊本に仕立てたものであり、その際、絵を殆ど全て省かざるを得なくなり、同時にそれに添えられた科白をも割愛するに至る。しかし、そうなると当然繋がりが悪く、文意の通じない箇所も生じてくるわけで、その際必要な科白部分を本文化し、整合させようとしたものと考えられる。この結果、刊本系の異同部、とりわけ拡大されているところは、説明的・具象的傾向が強い。絵巻系で別に科白をつける必要もなく、単に絵でさし示せば足ることも、刊本系では文章化の要があるからである。

信多氏は右のように述べられ、絵巻系の二本を以て、刊本系に先立つ古形を存するものとされた。氏のこの結論は、両系の本文の異同を、(1)絵巻系のうち国会本に近い本文を刊本系がもつ例、(2)絵巻系のうち女子大本に近い本文を刊本系がもつ例、(3)女子大本・国会本にまたがる本文を刊本系がもつ例、(4)絵巻系と刊本系の比較的大きい異同の例、(5)刊本系に存し絵巻系に欠ける本文例、(6)絵巻系に存し刊本系に欠ける本文例、の六種に分け検討を加えた結果であるが、とくに、古い絵巻を草子化した際の、絵やそれに伴なう絵詞の扱い方に関して鋭い洞察がなされており、右の信多氏の結論は充分な説得力をもつものと考える。

さて「物くさ太郎」というこの作品は、刊本系諸本にあっては、主人公の物くさ太郎は「おたかの大明神」と、太郎と結ばれた女房は「あさいの権現」と現れたとする。そして最古版の丹緑本は書名にも「おたかの本地」の称を冠している。そこで早くから、この「おたか」が問題となり、「愛宕」説、「お多賀」説、「穂高」説等が出されている。

「愛宕」説は、萩野由之氏が「物草太郎の草子も、古板本には、をたぎの本地（愛宕本地）とも題し……」と言われたのがもとで、平出鏗二郎氏や藤岡作太郎氏によって踏襲された。しかし、これは萩野氏の記憶ちがいであろう。古版本は「おたかの本地」で、「をたぎ」とした本は見ない。

第二の「お多賀」説は、藤井乙男氏の有朋堂文庫「御伽草紙」の頭注に「御多賀」と宛ててあるのが最初のようである。「日本文学大辞典」の島津久基氏の解説も「お多賀」説を採っている。藤井氏や島津氏は、それがどこの多賀神社を指すのかには触れておられないが、大島建彦氏は松本市出川町の多賀神社がこの地の人々から延命長寿の神とされていることから、長生の神とする「おたか大明神」との関係に注目されている。

第三の「穂高」説は、野村八良氏が「信府統記」や、吉田東伍氏の「大日本地名辞書」によって提唱されたものである。「信府統記」は、穂高神社の背に物草太郎の塚のあることを記し、太郎が住んでいたという「あたらしの郷」は筑摩郡の新村の辺と認めているが、「地名辞書」ではさらに、この辺を茂草庄と称したので、その地名に因んだ称呼が転じて「物くさ太郎」となったのであろうとも述べられている。この「穂高」説は、横山重氏もこの説が良いように思われると言われ、市古貞次氏も

これを採られている。(注18)

以上の三説は、未だ絵巻系伝本の知られていない時に、刊本系の伝本によって立てられたものである。従って、より古形を残すとすべき絵巻系においてどうなっているかが問題となるが、女子大本は巻末を欠くために、この部分が明らかでない。国会本では

とのは、ひたかの大明神、女は、あさひのこんけんと、あらはれたまひける

とある。この「ひたか」はどのように解すべきか。これに当る適切な神が思い当らず、誤写の可能性も多いとすると、絵巻系も現存の二本だけでは、有力なきめ手とならないのである。

なお、このことと関連して「信府統記」や「地名辞書」が問題としている、物くさ太郎の出身地については、絵巻系も

しなのゝ国のうちに、つるまのこほり、あたらしのかうと申ところに、おとこ一人あり、その名を、ものくさ太郎ひちかすとそ申ける（女子大本）

となっていて、刊本系と変らない。従来、刊本系の「つるまの郡」は「筑摩（つくま）郡」の誤写であろうと言われている。草仮名の「る」と「か」とはまぎれ易く、右の女子大本の「つるま」も「つかま」と読めぬこともない。「つかま」の誤読あるいは誤写としても差し支えないようであるが、この点もやや疑問が残ることは否めない。

上記のごとく「物くさ太郎」は本地物の形式をとってはいるが、神の前生を語る本地物として、その対象がはっきりしていない。しかし、それはともかくとしても、何よりも本地物というには、この作品はあまりにも異質なものを感じさせる。その最も顕著な点は、この作品には一貫して滑稽味が色濃く漂っていることである。冒頭から

名こそ物くさ太郎と申せとも、いるつくりのありさま、人にすくれて、ゆゝしくして、四町についしをつき、四方に門をたて、まへにいけをほり、つるかめをあそはせ、しまをつき、松すきをうへ、そりはしをかけ、きほうしにいたるまて、まことにけつこうにすくれたり、十二間にとをさふらひ、九間にわたりらう、つりとの、ほそとの、梅つほ、きりつほ、へや、あつま屋、まかきのつほにいたるまて、百種の花をそうへられける、十二まをひわたふきにふき、あやにしきをもて、てんしやうをはり、けた、うつはり、たるきのくみいれまても、きんくをのへて、まことにゆゝしく作り立て、いはやとおもへともいまはすこしたうくたらねは、竹四本はしらにたて、ひわたふきとおもひなして、こもを引おほいてそ、いたりける（女子大本絵巻）

と、いわゆるどんでん返しの手法によって笑いをかもし出す。以下、随所で剽軽な文辞を弄して、読者のくったくのない笑いを誘っている。それは「神道集」の説くような人間の憂悲苦悩を語る世界とは全く異なって、狂言に通じる解放的な笑いの文芸に変貌しているのである。

信多純一氏は、本作の結びの一文の中に、

をよそぼんぶは、ほんぢを申せば、はらをたて、かみは、ほんぢをあらはせば、三ねつのくるしひをさまして、ぢきによろこび給ふなり（丹緑本、女子大本絵巻はこの部分を欠く）

とある中の「凡夫は本地を申せば腹を立て」の一言は刮目すべきであって、真面目な唱導の姿勢の中に、このような皮肉な人間洞察の文句の入る余地はないとされ、

この一言が神々の座から、わが物くさ太郎ひぢかすを人間の煩悩世界に引きずりおろす。かれこれ思い併すに、本作は本地物に似て、実は非なるものである。畢竟するに本作は、一貫して本地物のパロディーをなしていると考えざるを得ないのである。(注19)

と述べられた。先の「貴船の本地」の最古本である慶應本にも「ほんふは、そのむかしをかたれは、きにさこふ」という一文が見られるので（二七六頁参照）、「凡夫は本地を申せば腹を立て」の解釈には問題があるが、この作品が、右の信多氏の言に同感を禁じ得ない性格を持つことは否めないと思ふ。

また、この「物くさ太郎」は「小男の草子」と非常に近い関係にある。小男とか、物くさとかいった普通でない人間が田舎から上ってきて、清水で見出した女を和歌の才によって遂に自分のものとするという、物語の基本的構造が共通している上に、女の家で誤って琴を割ってしまった時に、当意即妙の歌をよんで、かえって女を感心させたという記事が、両方の作品に見られる。その時の小男のよんだ歌は、

かすならぬ、うきみのほとの、つらきかな、ことはりなれは、物もいわれす（高安本）

というものであるが、「物くさ太郎」の刊本系では、女房が涙ぐんで、

けふよりは、わかなくさみに、何かせん

とよんだところ、太郎は即座に、

ことはりなれは、ものもいはれす

と付けたとある。両者の間に交渉のあったことが窺われるのである。ただし「物くさ太郎」の絵巻系には、琴を割ることはあるが、右の和歌の応答がない。女子大本絵巻を見ると、その部分の画図の中に、

あれ御らんせよ、けふよりは、なにを御手なくさみにさせ給ふへき、かなしや

という侍女の言葉を記してある。刊本系の和歌の上句は、この絵巻系の絵詞によったもののように思われる。一方「小男の草子」の方も、琴割の一件は乙類本には見えない。しかし、こちらは前章で述べたごとく、甲類本の方が古体で、伝本も多く広く流布していた形跡を明らかに示している。すると「物くさ太郎」は、「小男の草子」の甲類系統をうけて琴割の趣向をとり入れたが、和歌だけは刊本系の成立の時点において増補されたということになるのであろうか。しかし、この琴割の趣向は、前掲のごとき和歌があってこそ効果があると思われるので、「物くさ太郎」の絵巻系が「小男の草子」を下敷きにしたものとすると、和歌だけをとり入れなかったことに疑問を感じる。信多氏は、「小男」と「物くさ」の先後関係については、本文

関係の不安定なこともあり、事柄が複雑で容易に決定し得ないとし、「琴わり」の詞句は当時のごく一般的な秀句のたぐいで、その上に立って各方面に展開していったのではないかとも考えられるという見解を出されている。かれこれ、即断するのはまだ早いようであるが、この両作品が全体の構想の上で酷似していることは否めないので、やはり両者の間には直接の影響が働いていたと見るべきではなかろうか。

「物くさ太郎」の一貫した主題は「のさ者」という中世的人間を描くことにあったという新説を出された佐竹昭広氏は、小男は、清水でたまたま見かけた上臈に恋をし、他人のとりもちで女と逢うことができたのであるが、太郎は、はじめから美女を掠奪するつもりで、それに恰好な場所として清水を選んだのであり、妻たるべき女を見つけてからの彼の行動は、すこぶる強引で粗暴であったという違いを指摘され、

（物くさ太郎の）物語りの全篇をつらぬくものが「のさばり」の精神であるかぎり、肝要なのは「辻取り」の方であって、あとにつづく「琴わり」の歌などではありえない。『物くさ太郎』を小男ものの改作と見なすかんがえに立つならば、「琴わり」の一件は小男ものの引きつぎであると同時に、「辻取り」は『物くさ太郎』にいたって附加された部分だということになる。

と述べられている。(注20)「小男」と「物くさ」とを比較した場合、氏が「小男ものは、そこから物くさ太郎という人物を呼びだすことによって、新しいタイプの主人公を創造した。」とも言われるように、たしかに前者から後者への発展と見るのが自然である。

また、本地物としてみた場合も、小男が五条天神の本地とされたのには、それなりの理由を考えることができた（三〇五頁参照）。しかし「物くさ太郎」の方は、「穂高」にせよ「お多賀」にせよ、物語の主人公との関係はきわめて稀薄である。怠け者の成功談としての「物くさ太郎」は、広く流布する三年寝太郎型の昔話の類型に入る。この作品を創作するに当って、作者が原拠とした説話の伝承地域が、かかわりをもっていたのかもしれないが、作者にとっては、もはや神の前生を語る物語ということは、さしたる意味をもっていなかったのではないか。これも佐竹氏が「本書も一応、本地物めいた体裁をとってはいるが、そんなものは形式でしかなく、内容にはなんのかかわりもない。」と言われたのに同感を禁じ得ない。より古い形態を伝えると推測される絵巻系の伝本が結末部を欠いているので、刊本系のみによって言うのは乱暴であるが、「おたかの本地」の「おたか」は、作者が意識してぼかした言い方をしたと考えることはできないであろうか。刊本系の最古版である丹緑本は、題簽も内題も、また本文の中においても、「おたか」あるいは「おたが」とすべて仮名書にしている。「穂高」もしくは「お多賀」の意であるならば、どこかで漢字を宛てそうなものである。もしかしたら、この「おたか」は実在の神ではないことを示そうとする意図を含んでいたのかもしれないと想像したくなるのである。

（注13）萩野由之氏「新編御伽草子」上巻「びしやもんの本

地」開題。

(注14) 平出鏗二郎氏「近古小説解題」。藤岡作太郎氏「鎌倉室町時代文学史」。

(注15) 大島建彦氏「ものくさ太郎の伝説」(「中世近世文学研究」二号)。

(注16) 野村八良氏「室町時代小説論」。

(注17) 横山重氏編「室町時代物語集第五」解題。

(注18) 市古貞次氏「御伽草子」(日本古典文学大系)頭注。

(注19) 信多純一氏「古本物くさ太郎」(松蔭国文資料叢刊4)解説。

(注20) 佐竹昭広氏「下剋上の文学」。

(付記)

本稿の印刷中に、美濃部重克氏が「物草太郎の口承的仕組み小考」と題する論考を発表された(西尾光一教授定年記念論集説話と説話文学、昭和五十四年六月笠間書院刊)。この論文は、信多純一氏が「物くさ太郎」を、在地の伝承に根を持たない、机上で創作された本地物のパロディーであり、その成立は近世初頭にまで下げて考えねばならないのではないか、という問題提起をされたのに対する反論である。美濃部氏は、「物草太郎」の叙述様式の上に見られる口承文芸的特徴をいくつも指摘され、この作品を、口承の物語を下敷にして制作されたもので、在地の本地物に由来するとした上で、その原構成に関する一つの推論を提出された。それは、本来の本地物たる物くさ太郎の物語には、物くさ太郎の出自と成長とを語る悲劇的な貴種流離の物語が前半にあって、それが「物草太郎」として作品化されるに当って切り捨てられ、残りの部分が滑稽味を拡大されて形成されたものではないかというもので(現存本の終りの方に、物くさ太郎が貴種の出であったことを述べる記事があるのは、その痕跡であろうとする)、それ故に、本地物の形式を持つにもかかわらず、物語に悲劇性が見られないという、内容と形式との間の齟齬をきたしたものと解されたのである。

たしかに、「物くさ太郎」を純創作として見ると、構想や筋の運びの上に理解しがたい矛盾や飛躍がある。それがこの作品の成立過程に由来するのではないかとする想像を否定することはできない。岡見正雄氏は、南北朝期と推定される「仁和寺絵目録」に「物久佐聟絵一巻」の名が出ていることを指摘されている(お伽草子の世界—その絵解的表現、太陽古典と絵巻シリーズⅢ)。この物語には何か原型ともいうべきものが、相当に古い頃から存在していた可能性は十分にあると言わなければならないであろう。したがって筆者も「物くさ太郎」を純創作とするのは躊躇されるが、しかし、物くさ太郎のごとき人物を主人公にした古い本地物語が存在したとしても、現存の「物くさ太郎」を「神道集」に採られたような本地物と同列に扱うことはできないのではないか。現存「物くさ」は「小男の草子」とともに、既に本地物の域外に出た作品と考えたい。もし改作によって成った作品とすれば、その改作の性格が問題になると思うのである。